は12cm前後ではないかとみられる。なお，柱根（50）は南から2間目の柱穴に残存していた。柱穴の埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むものであった。復元できたのは柱根1点であった。

出土遺物

木製品（Fig.177－50）

柱根で，腐食しており，調整痕は確認できない。残存長21.5cm，残存幅10.5cmである。

SA－505

調査区中央部南西よりで検出したL字形の塀である。SB－501の南西側に位置する。5間分（8.00m）を検出し，柱間は1.10～2.20mと区々である。柱穴は径約30cmの円形で，柱径は10cm前後ではないかとみられる。柱穴の埋土は黒ボク混じりの黒褐色粘質土であった。復元できた遺物はなかった。

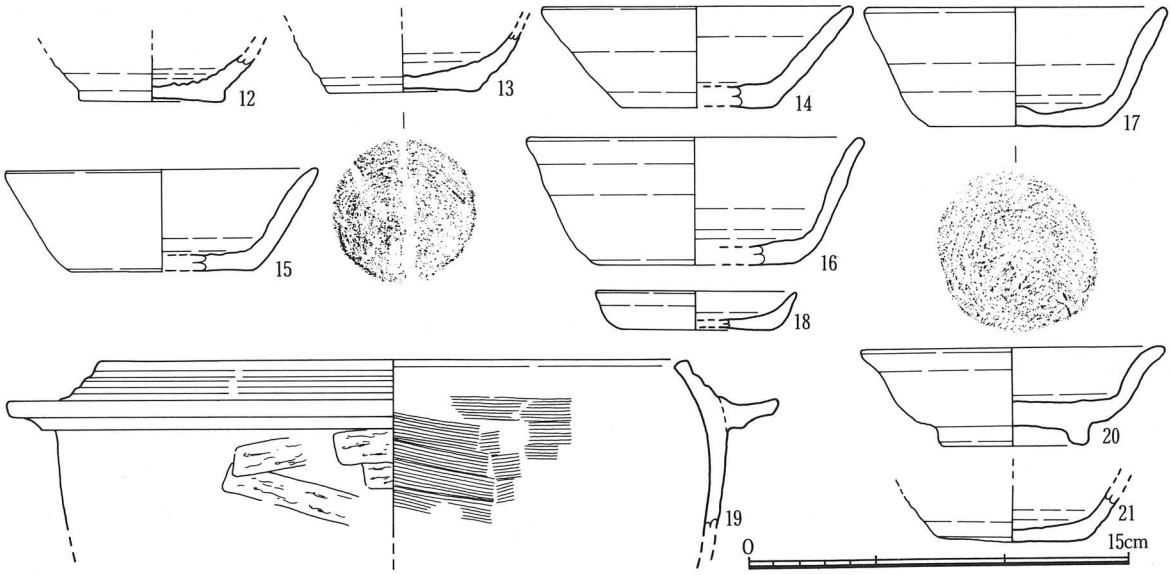


Fig. 172　掘立柱建物跡，塀跡出土遺物実測図

C 土坑

SK－501（Fig.173）

調査区中央部北西よりで検出した方形土坑で，SB－505・506の西側に位置する。長辺1.78m，短辺1.52m，深さは15cmで，北側にピット2個が掘り込まれていた。長軸方向は真北に近いN－3°－Eである。埋土は暗灰褐色粘質土に炭化物と赤黄色火山灰土粒を僅かに含むものであった。遺物は8点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.174－22～25）

22・23は杯で，器壁が厚い。口縁部はほぼ真直ぐ外上方に上がり，端部は丸く仕上げられる。底部外面は回転糸切り底で，内外面には比較的丁寧な回転ナデ調整が施される。24・25は小皿で，口縁部は外上方に短く上がる。底部外面は回転糸切り底で，内外面は回転ナデ調整が施される。25の口縁部外面には煤が付着する。

鉄製品（Fig.174－26～29）

26～28は刀子で同一個体とみられるが，接合できなかった。26が柄の部分，27が刃先，28が身の部分とみられる。幅1.2cm，全厚は0.4cmである。29は角釘とみられるが，頭と先端が欠損する。

SK－502（Fig.173）

調査区北部で検出した不整楕円形土坑で，SB－501の北隣に位置する。長辺1.55m，短辺1.20m，深さは13cmで，底面は西に傾斜する。長軸方向は真北に近いN－11°－Wである。埋土は暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰土粒を僅かに含むものであった。遺物は1点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.174－30）

杯で，口縁部を欠損する。体部は内湾気味に上がる。底部外面は回転糸切り底で，内外面は回転ナデ調整である。

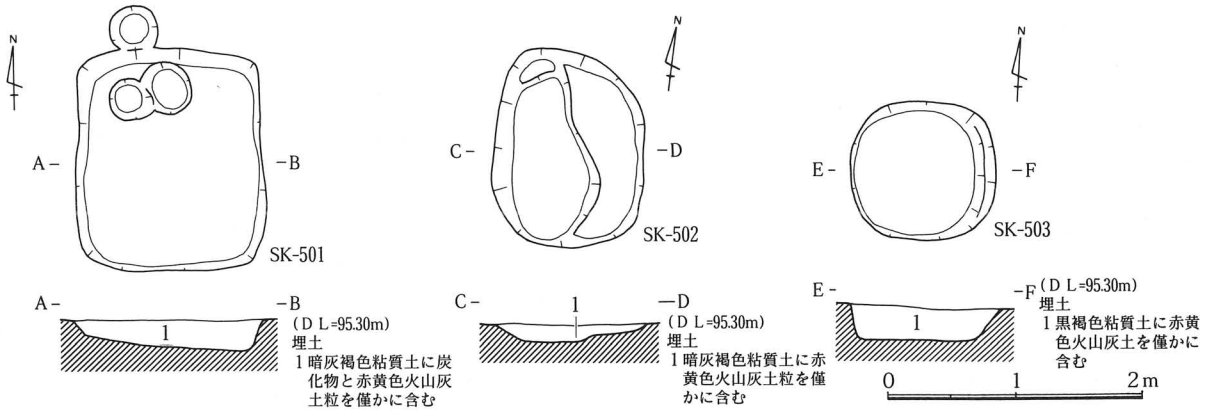


Fig. 173　ＳＫ－501～503

SK－503（Fig.173）

調査区南東部で検出した不整円形土坑で，SB－501の南東隅に位置する。径1.15m，深さは28cmで，断面は逆台形を呈す。埋土は黒褐色粘質土に赤黄色火山灰土を僅かに含むものであった。復元できた遺物はない。

SK－504

調査区南西部で検出した方形土坑で，SA－505の西側に位置する。長辺3.35m，短辺0.81m，深さは5cmである。長軸方向はN－5°－Eである。埋土は暗灰褐色粘質土であった。復元できた遺物はない。

D 溝跡

SD－502（Fig.175）

調査区西部で検出した南北溝で，建物群の西側に位置する。平成2年度の試掘調査の際確認していた溝で，さらに南に延びる。幅約60cm，深さは10～22cmで，南に向って傾斜しており，約19.0mを検出した。断面は箱形ないし逆台形を呈す。埋土は黒褐色粘質土に褐白色粘質土粒を若干含むものであった。出土遺物は少なく，2点が復元できた。

出土遺物

土師質土器（Fig.174－31・32）

2点とも杯である。体部はやや内湾気味に上がり，口縁部で小さく外反する。底部外面は回転糸切り底で板状圧痕が残り，内外面とも回転ナデ調整で，内底面にはナデ調整を加える。

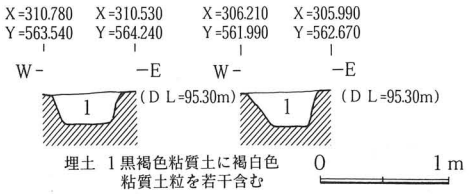


Fig. 174 ＳＤ－502 セクション図

SD－503

調査区中央部で検出した短い東西溝である。幅35～40cm，深さは5cm前後で，約4.00mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は黒褐色粘質土であった。復元できた遺物はなかった。

SD－504

調査区中央部で検出した短いL字形の溝である。幅18～20cm，深さは5cm前後で，約4.00mを検出した。断面はU字形を呈す。埋土は黒褐色粘質土であった。復元できた遺物はなかった。

SD－505

調査区南部で検出した短い東西溝で，円形のピットに切られている。幅18～25cm，深さは6cm前後で，約3.60mを検出した。断面は舟底状を呈す。埋土は黒褐色粘質土であった。復元できた遺物はなかった。

Ｅピット

多くが建物跡等の確認には至らなかったが柱穴ではないかとみられ，柱根が残存していた柱穴（P－510）もあった。掘方は，大半が円形で径20～60cm，深さは10～50cmで，径30～40cm，深さ30cm前後のものが多い。中央部のピットの埋土は黒ボク混じりの暗灰褐色粘質土に赤黄色火山灰のブロックを比較的多く含むもので，東部のピットは赤黄色火山灰土はほとんど含んでいなかった。また，岩井口遺跡で見られたような径70cm前後のピットは調査区南部で僅かに認められた程度であった。

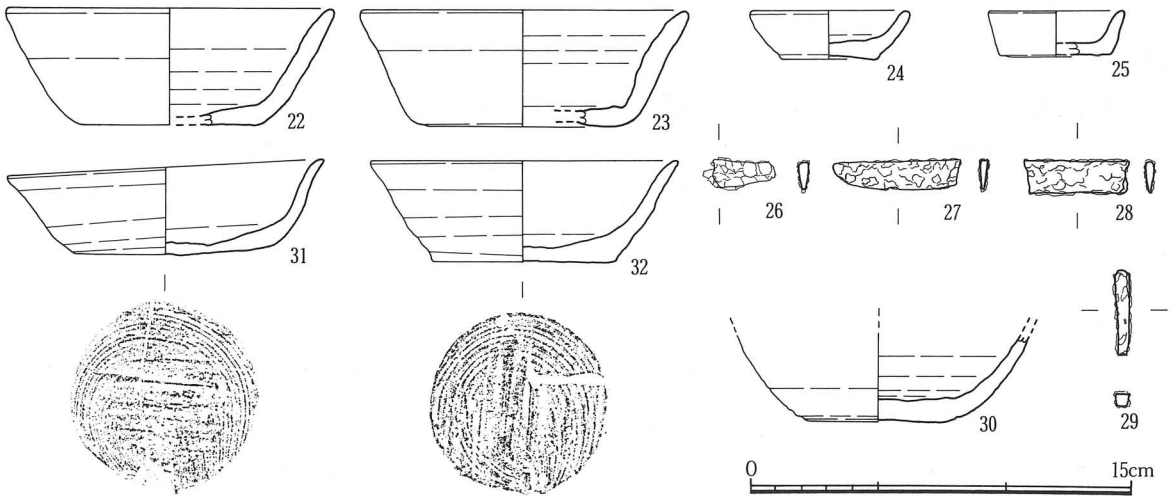


Fig. 175 土坑，溝跡出土遺物実測図

出土遺物

土師質土器（Fig.176－33～46）

33～40は杯である。体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に外上方に上がる。底部外面は回転糸切り底で，板状圧痕が33に残る。33は内外面とも回転ナデ調整で，内底面にナデ調整を加えている。他の杯は口縁部から内面にかけて回転ナデ調整を施し，体部外面は未調整となっている。36・39・40は内底面にナデ調整を加えている。41～45は小皿で，口縁部は短く外上方に上がる。底部外面は回転糸切り底で，口縁部から内面にかけては回転ナデ調整を施す。口径5.8～8.1cm，器高1.6～2.1cm，底径4.3～5.8cmである。46は羽釜で，鍔と底部が欠損する。胴部は内湾気味に上がり，口縁部で内傾し，端部は内傾する平面をなす。口縁部外面には3段の稜となっている。胴部外面はヘラ削り，内面はナデ調整で，口縁部はヨコナデ調整を施す。（P－501から33・35・38・40，P－502から34，P－503から36，P－504から37・39・45，P－505から41，P－506から42，P－507から43，P－508から44，P－509から46がそれぞれ出土している。）

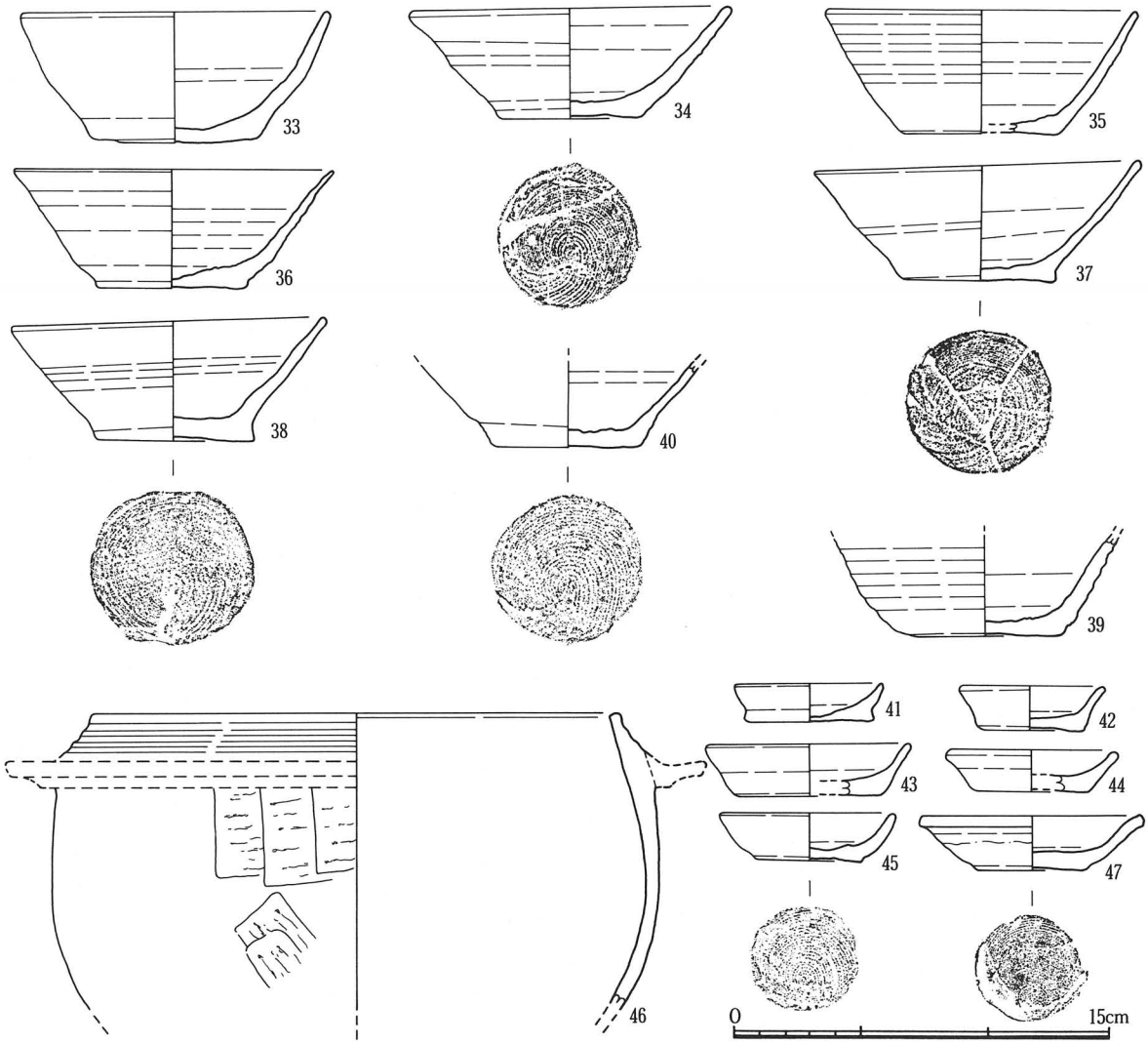


Fig. 176 ピット出土遺物実測図

瀬戸・美濃系（Fig.176－47）

小皿で，体部はやや内湾して上がり，口縁部で小さく外傾する。端部は外傾する凹面をなす。底部外面は回転糸切り底で，口縁部から内面にかけて緑色釉を施釉する。（P－505）

木製品（Fig.177－51）

柱根で，腐食しており調整痕は確認できない。残存長18.1cm，残存幅18.3cmである。（P－506）

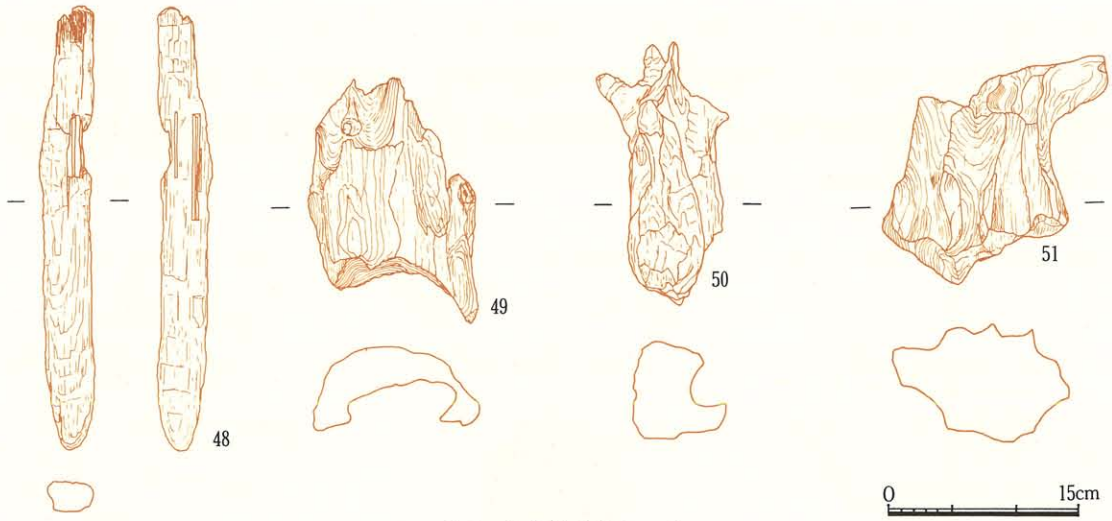


Fig. 177　柱根等木製品実測図

第Ⅳ章　二ノ部城跡

1. 調査の契機と経過

(1) 契機と経過

二ノ部城跡は斗賀野盆地中央部の独立丘陵上に所在する中世の山城で，別名斗賀野城跡とも呼ばれ，以前よりその所在が知られており，山下には城を取り囲むように水田が巡っていることから掘跡が所在するのではないかとみられていた。今回，その水田部分が圃場整備の対象となり，平成2年度に実施した事前の試掘調査によって城の南東部で遺物包含層が検出され，堀跡が残存する可能性が考えられたため平成5年度に本調査を実施することとなった。遺物包含層が現地表下比較的深い部分で検出されていることから調査は水路と農道部分が対象となった。

調査は，平成5年度に計画されていた二ノ部地区の県営圃場整備事業に伴うもので，佐川町が高知県（須崎耕地事務所）の委託を受け，佐川町教育委員会が調査主体となり高知県教育委員会並びに高知県文化財団埋蔵文化財センターの指導のもと実施した。調査対象となったのは，工事によって掘削並びに削平される部分であり，調査期間は平成5年10月20日・11月18日～11月24日までの実働5日間であった。なお，調査と工事は通年施行で実施されたため，調査終了と共に遺物包含層は削平された。

(2) 調査日誌抄

1993年10月20日・11月18日～11月24日

10.20　二ノ部遺跡と共にトラバース測量を実施する。TP－13～15が二ノ部城跡の部分に該当する。

11.18　発掘区の設定を行う。15×5mのトレンチを2ヶ所に設定する。

11.19　2ヶ所のトレンチの表土剝ぎを行う。

11.22　遺物包含層の調査を中心に行う。調査範囲が限定されたため堀跡と考えられる立ち上がりなどは確認されなかった。また，遺物の量が極めて少ない。全景並びに土層断面の写真撮影を行う。

11.24　周辺の地形図並びに土層断面図の実測を行い，調査を終了する。

2. 調査の概要

(1) 調査の方法

今回の調査対象地は城の堀とみられる部分であったが，遺物包含層は地表下60～90cmと深いため発掘調査箇所は水路と農道部分で，まず，15m×5mの発掘区を2箇所設定して調査を実施し，遺物の出土状況に応じ，発掘区を拡張することとした。基準点並びに基準標高は二ノ部遺跡調査の際に測量し，測量結果はTab.3に記載してある。

また，調査では南の調査区をAトレンチ，北の調査区をBトレンチと呼称した。発掘区の拡張は行わず，発掘調査面積は当初の150m^{2}であった。

(2) 調査の概要

2箇所の発掘区を設定して調査を実施した結果，当時の遺物包含層は検出されたが，遺物を僅かに含んでいる程度で，かつ調査対象区域内では，堀跡と断定できるものは検出されず，A･Bトレンチの調査で本調査を終了した。以下，層序及び堆積層から出土した遺物について記す。

層序

発掘区で認められた基本層序は以下のとおりである。

第Ⅰ層　表土層

第Ⅱ層　灰色砂性粘質土層

第Ⅲ層　暗灰色砂性粘質土層

第Ⅳ層　青灰色砂岩粒を多く含む暗灰色砂性粘質土層

第Ⅴ層　暗灰色粘土層

第Ⅵ層　青灰色砂礫層

第Ⅰ層の表土層は，現在の包含層であり，厚さは20～30cmである。現況は水田で，水捌が良くない。

Fig. 178　調査区全体図(S=1：2,000)

第Ⅱ層は旧表土層とみられ，下部には鉄分が沈澱したとみられる礫を含む褐灰色粘質土（床土）の堆積が認められた。

第Ⅲ層が遺物包含層とみられる土層で，炭化物や木片の堆積も認められた。特に，下層に多く，当時の堀の底ではないかと考えられる。だだし，今回の調査区では堀の立ち上がりは認められなかった。

第Ⅳ層は自然堆積層で，氾濫の影響か礫が多く含まれていた。

第Ⅴ層も自然堆積層でかつてこの付近が湿地であったことが窺える。

第Ⅵ層は基盤の砂礫層で，標高的には北隣を流れる斗賀野川と同じ高さで，常に湧水があった。

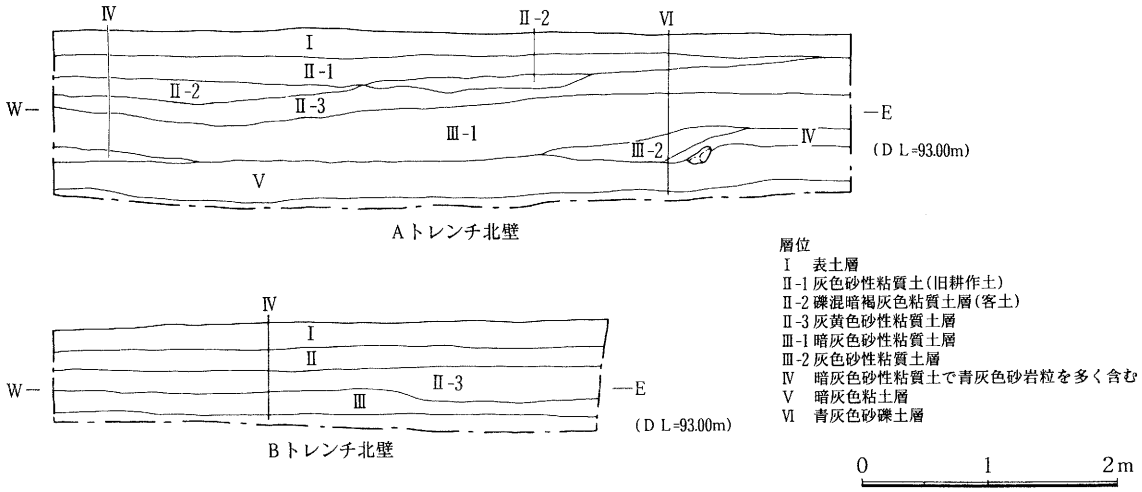


Fig. 179　Ａ・Ｂトレンチセクション図

第Ⅱ層出土遺物

肥前系陶磁器（Fig.180－1～3）

3点とも伊万里である。1は碗で，口縁部が欠損する。体部は内湾気味に上がる。体部外面には窓絵，高台外面には2条の界線，見込には梅花文が施される。表面には白色釉を施釉し，畳付けは釉剝ぎが行われる。2は広東茶碗で，底部が残存する。高台は削り出し高台である。体部と底部の境に1条の界線が施される。高台外面から内面にかけて明緑色釉を施釉している。3は菊花皿で，型押しによる陰刻が施される。高台は削り出し高台である。器面には明緑色釉が施釉され，高台畳付け内面は釉剝ぎが行われる。

木製品（Fig.180－9）

差歯の陰卯下駄で後歯は欠失する。後壷は後歯より前にある。台部は長さ22.0cm，幅10.0cm，厚さ3.5cm，歯は高さ4.7cm，幅10.4cm，厚さ1.2cmである。

第Ⅲ層出土遺物

土師質土器（Fig.180－4）

小皿で，口縁部は斜め上方に短く上がり，端部を細く仕上げる。底部外面は回転糸切り底で，内外面は回転ナデ調整を施す。

備前（Fig.180－5・6）

5は擂鉢で，口縁部が残存する。口縁部は外上方を向き，端部はやや上下に拡張され，外傾する

凹面をなす。6は壷で，口縁部は短く直立し，端部を玉縁状に仕上げる。

常滑（Fig.180－7）

甕の肩部の破片で，外面には刻印が見られる。内面はナデ調整である。

白磁（Fig.180－8）

碗で，口縁部が残存する。やや内湾気味に上がった体部は口縁部で小さく外傾する。器面には灰白色釉を施釉するが，口唇部内面は無釉となっている。

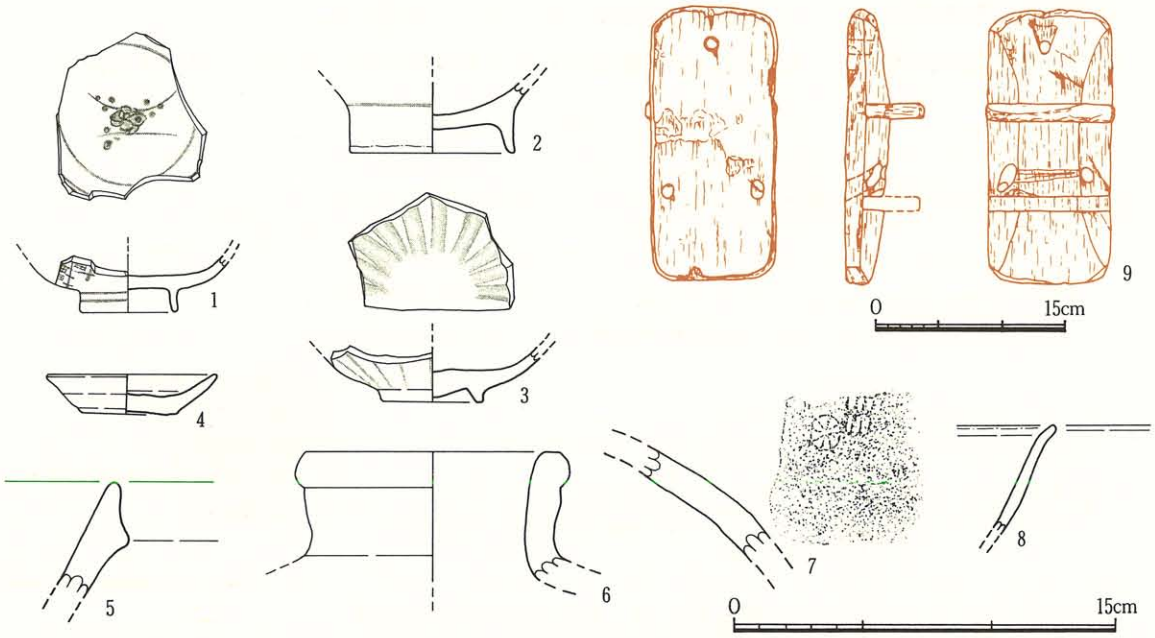


Fig. 180　第Ⅰ・Ⅱ層出土遺物実測図

(3) 二ノ部城跡

本城は斗賀野盆地中央部の独立丘陵上に位置する中世の山城で，斗賀野城跡の別名もあり，南西側には伏尾城跡，南の山上には木陰山城跡そして遥か南西方向には城台城跡を望むことができる。城主は米森幻蕃と伝えられ，元亀2年(1571)に長宗我部氏の侵攻によって落城している。この城跡付近は斗賀野の中央部に位置することから明治以降も斗賀野の中心とみえて南東部山下には斗賀野村役場や小学校が造られ，現在も西南山下から南側にかけては人家となっている。

城跡は，現況で北西方向に向って人為的に設けられた三段の平場があり，詰，二ノ段，三ノ段に分かれていたものとみられ，複郭式山城の形態を取っていたものと推測される。詰は標高約112mに位置し，現在八幡神社が鎮座している。地表面は岩盤が露出しており遺存状況は悪く，南東側は二ノ段からの犬走り状の狭い道がみられる程度で，急傾斜となっている。二ノ段は北西方向に広い平場を有し，南東側は曲輪状に犬走り状の狭い道となっている。広い平場は竹薮となり荒れているが，後世手の加わった痕跡はなく，遺存状況は比較的良いものとみられる。この二ノ段の東部では幅約2mの竪堀1条を確認することができる。三ノ段は北西方向に比較的広い空間を有し，城の縄張りの中では最も広い空間を有す。現況は二ノ段と同じく竹薮となり荒れてはいるが，後世手の加わった痕跡はあまり認められず，遺存状況は比較的良いものとみられる。

第Ⅴ章　考察

本章では，今回報告した遺跡について，存続した時代とその性格を検出された遺構から考え，それぞれの関連性等についても考察を加えていきたい。そして，最後にこれら遺跡を含む周辺遺跡の消長をみてみたい。

1. 岩井口遺跡について

当遺跡については，2度に亙る発掘調査が実施され，ほぼ遺跡の大半を調査することができた。今回報告した県営圃場整備に伴う第1次調査の際に当遺跡の約70％を調査している。今回の調査によって確認された遺構は，大きく弥生時代と中世に区分することができる。まず，弥生時代の遺構についてみてみよう。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構で明確な遺物を伴うものは，竪穴住居跡（ST－101）とピット（P－101）であり，叩目のある土器が伴出しており，本地方では弥生時代終末期に該当さすことができる[(1)]。叩目が施された土器は後期後半以降県内一円にその分布がみられ，底部の丸底化と胴部の球形化に象徴されるように，土師器へと移行していく。今回確認されたものは，その中でも比較的新しい段階に属するものと判断される。この時期には，庄内式の新段階併行の搬入品が散見される場合が多い[(2)]が，今回は確認されなかった。なお，佐川町襟野々遺跡からは搬入品とみられる庄内式併行の甕と高杯が出土している[(3)]。遺構数は先述のもの以外にこの期に推定されるものはほとんどなく，集落と見るよりか単独の住居とみた方が良さそうである。

竪穴式住居跡の形態についてみてみると，今回確認されたST－101は，北半分が未調査であるが，南半分から住居を取り囲む形に設置された周溝が検出されている。住居自体は方形の平面形で4本柱で棟を支えていたものと推定され，一部に壁溝がみられるごく一般的な形態をとっている。一方，調査した南半分には住居の上端から約2.0～2.5m離した箇所に幅約30cmの周溝が巡っており，住居を取り巻いていたものと判断される。県内では100棟近い数の竪穴住居跡が調査されているが，このような形態のものは確認されていない。住居跡は壁高が25cmと削平の影響を受けているものと考えられることからこの溝は当時50cm前後の深さがあったものとみられ，立地条件に関連した付随施設と考えた方が良さそうである。なお，住居と周溝との間には土盛を築いていたものとみられる。

これら弥生時代終末の遺構以外にも，復元できなかったが弥生時代前期新段階に遡り得る遺物が出土しており，比較的古くから住居を構えていたことが窺える。この時期の遺構としては，B区のSB－201，SK－204・205を挙げることができる。SB－201はその形態からみて高床式倉庫であった可能性も考慮され，SK－204・205は隣接しており，貯蔵穴等ではなかろうか。これ以外にもSK－101からは中期とみられる土器片，中世のP－140からは混入したとみられる扁平片刃石斧（Fig.54－200）が出土しており，弥生時代中期にも人の痕跡を認めることができる。

このようにみてみると，量的には少ないが弥生時代前期新段階からこの地は生活圏に含まれていたものとみられ，弥生時代後期後半以降，後述する二ノ部遺跡と共に活動が活発になってくるようである。

(2) 中世

岩井口遺跡を象徴する時代で，13世紀に成立した溝に囲まれた館（屋敷）跡が確認されている。中世の屋敷跡としては高知空港拡張整備事業に伴う田村遺跡群の発掘調査で確認された“溝に囲まれた屋敷跡（環濠屋敷）”群[4]以来で，13世紀に遡るものは未確認であった。

まず，館跡の構成をみてみると，館跡は東側を除く三面を2条の溝跡で区画し，東側は1条の溝で境をなしている。西側の2条の溝の間が5～6mあり，土塁が設けられていたのではないかと推察される。今回の調査で，館内では溝と棟方向を同じくする17棟の掘立柱建物跡が検出され，館外では18棟の掘立柱建物跡が確認されている。建物の規模，柱穴なども館内のものが大きく，館外の建物は梁間が1間程度で，柱径が館内のそれより一回り小さく，全体に小規模である。柱間寸法でも館内は6～7尺（1.80～2.10m）前後であるが，館外は4～5尺（1.20～1.50m）前後であり，明らかに違いがみられる。

館内では，SB－101・102が中心となる建物とみられ，それぞれ総柱建物となっており，主屋と考えることができよう。また，館内には間仕切り柱を持つ建物（SB－106～108・116）も散見され，内SB－106～108は建替えによるものと判断される。全体的には2間×3間と比較的簡単な構造の建物が多く大きくても一面庇付きの2間×4間程度の建物となっている。これら建物は館（屋敷）を囲む溝跡（SD－102～104など）に平行か直交した建物配置となっており，一つの大きなまとまりとして捉えることができる。

館内外全体の構成をみると中央に溝に囲まれた館（屋敷）を置き，周辺に小規模な建物を配していたことが窺えられ，領主（主人），そのまわりに家来（従者，家人），さらに外側に下人という形で配置されていたものと推察される。このような形態は当時の在地領主（国人）の館（屋敷）として捉えることができるのではなかろうか。

館の規模をみてみると，東西約45m（130尺），南北約45m（130尺）に及び敷地面積は約2,025㎡で，当時の表記ではほぼ一段三十代に相当する。この敷地面積は田村遺跡群で調査された「溝に囲まれた屋敷跡」と比較した場合，2,000㎡を上回るものがないことからすると当時としては比較的規模の大きな館（屋敷）跡であったものと推測される。また，今回遺構が検出されたA～C区と第2次調査[5]のA区及びB区の調査面積を総合すると4,845㎡となり，当時の表記でほぼ三段四十代に相当する。『長宗我部地検帳』でこの岩井口に関する記事をみてみると，岩井口村には天正18年（1590年）当時水田（中下田）となっているが「土ゐヤシキ」の地名がみられ，丁度この溝に囲まれた館跡が検出された部分の田畑は現在も「土井」の地名が残っており，『長宗我部地検帳』にみえる順番からしてもこの「土ゐヤシキ」に該当するものと考えられる。この「土ゐヤシキ」は天正18年間には存在せず，地名だけが残ったものと判断される。

次に，出土遺物から館（屋敷）跡の時期について考えてみたい。遺物の大半は土師質土器であり，

形態的にはA～C類の大きく3種類に分類することができる。すなわち，A類は器高指数が30前後と口径に対し器高が低いもの（Fig.43－49）であり，出土量は少ない。B類は器高指数が35前後のもので，器壁が厚いもの（Fig.48－115～117）である。C類は器高指数が40前後のものでSD－102から多量に出土している。また，SD－102からは東播系須恵器の甕（Fig.47－109），備前の擂鉢（Fig.47－110），青磁の碗（Fig.47－112）などが伴出しており，概ねの時期が想定できる。まず，109は魚住30号出土[6]のものに酷似しており，魚住Ⅰ期（13世紀中葉から後半）に該当するものと考えられる。110は備前Ⅰ期でも前半に属するもの[7][8]とみられ，13世紀後半から14世紀前半に位置付けられよう。111は所謂鎬蓮弁文のある碗で13世紀代が想定される。このようにしてみてみると13世紀後半を中心とした時期が考えられるが，瓦器碗が全く出土していないことを考え合わすと14世紀に入る可能性も考慮されよう。これからするとC類の初現は13世紀後半の時期が考えられ，底部の形態に差異がみられることから14世紀代にも使用されたのではなかろうか。一方，B類はC類に比べ，器壁が厚く，口縁部が内湾気味になるなどの特徴がみられる。丁度，二ノ部遺跡のE区から類例が出土しており，それからすると14世紀代に該当するものとみられる。A類はピットを中心に何点か出土している。明確な伴出遺物がなく時期の決め手を欠くが，他の遺跡の例から考えるとB類より後出するものとみられ，14世紀後半から15世紀前半にかけての時期が考えられる[9]。

これら遺物以外にも東播系須恵器のこね鉢が散見され，瀬戸・美濃系のおろし皿（Fig.53－197），土師質の羽釜（Fig.74－4）そして備前の擂鉢（Fig.50－142）などの搬入品がみられる。これらの遺物の年代をみてみるとここの東播系須恵器は13世紀前後[10]が考えられる。197のおろし皿は底部が残存するが口縁部は二又状をなしていたものとみられ，古瀬戸の編年でみると中Ⅲ期ないし中Ⅳ期に該当し，時期的には13世紀中頃[11]に位置付けられよう。土師質の羽釜[12]は搬入品で13～14世紀のものとみられる。備前の擂鉢（Fig.50－142）は今回出土したものの中では最も新しいもので，備前Ⅳ期の後半[13]とみられ15世紀後半から16世紀初頭に位置付けられよう。

これら遺物から館跡の時期をみてみると，13世紀中頃に館が造られ，13世紀後半ないし14世紀初めには内側の溝が掘り直され，館が拡張される。そして，ほぼ14世紀をとおし館が機能し，15世紀の早い時期に廃絶したのではなかろうか。ただし，SD－111から出土した擂鉢142から一部の遺構は16世紀初頭まで機能していたものとみられる。また，このSD－111は館と平行して設置されていることから館との関連も考慮されよう。

以上，館跡についてみてきたが，この斗賀野地区には『長宗我部地検帳』によると5ヶ所に「土居」に関連した地名[14]が見られ，3ヶ所が天正18年当時ヤシキ（中下ヤシキ）として残存しており，残る2ヶ所，岩井口の「土ゐ」と島田の「土ゐ」が水田（上中下田）となっている。岩井口の「土ゐ」は前述の溝に囲まれた館そのものと考えられ，島田の「土ゐ」は二ノ部遺跡の南に隣接する二ノ部南遺跡の中に現在「土居ヤシキ」の地名が残っていることからその部分に含まれるものとみられる。後者については未調査であり，その実体に迫ることはできないが，『長宗我部地検帳』に記載された面積は一町九段十代と岩井口のそれより遥かに広いものである。ただ，すべてが「土ゐ」に関係したものとは考え難く，実際どのような規模であったかは今後の調査を待たざるを得ないであろう。最後に，この「土ゐ」の主について考えてみたい。中世のこの時期，『佐伯文書』の中に佐河四郎

左衛門入道と度賀野又太郎入道の名が見られ，在地領主として佐川郷の佐河氏，度賀野庄の度賀野氏の存在が考えられる。丁度，この館が存在した時期と度賀野氏が活躍した時期が一致している。このことからこの館跡は度賀野氏の居館とも考えられなくないが，未調査の島田の「土ゐ」が残っており，その実体が注目される。今回はこの館跡の主の候補の一人として度賀野氏の名を挙げることまでに留めておき，その実体については今後の調査と研究に期待したい。

2. 二ノ部遺跡について

二ノ部遺跡では，岩井口遺跡と同じく弥生時代と中世の遺構が確認された。これら遺構は大きく東西3箇所で確認されており，現状で平坦な地形もかつては起伏していたものとみられ，微高地となった部分から遺構が検出されている。今回の調査では調査区が限定されたため全容は判明していないが，全体の地形が南から北に向って傾斜していることからそれぞれ南北に細長い立地を呈しているものと推測され，立地面積はB区からA区にかけてが最も広く，次にD区とE区を合わせた東端の部分，そして，調査区中央部のC区の順となっている。以下，弥生時代と中世に分けてみてみることにする。

(1) 弥生時代

今回の調査ではB区とE区から遺構が検出されいる。B区からは竪穴住居跡3棟を中心とした集落の一部，E区からは微高地の頂部を南北に走る溝跡が検出されており，B区を中心とした西側に集落，東側の溝は水田への用水路とみられ，微高地と微高地の間で水田を作っていたのではないかと推察される。以下，第Ⅲ章で行った弥生土器の分類を整理した上で時期を検討し，竪穴住居跡を中心とした遺構の時期を考えてみたい。

今回出土した弥生土器は壷が6類，甕が3類，甑が2類，鉢が5類に大きく分類することができた。まず，壷では，A類とB類はそれぞれ口縁部がラッパ状に大きく開くもので，口頸部の高さに差異がみられる。A類の底部は平底ないし丸底に近いものもみられるが丸底になったものがないのに対しB類の底部はほぼ丸底で球形に近い胴部をなしており，B類が新相を呈していると判断される。C類は口頸部が短いもので，胴部が長胴形をなすものから球形のものまでみられ，前者の底部は平底で，後者の底部は丸底となっており，前者から後者への変遷が考えられる。D類は所謂二重口縁壷で，すべて口縁部が内傾する形態をとっている。出土点数は少ないがバラエティーに富み，口縁部の拡張に伴って胴部の球形化が進む傾向が看取できる。E類は小形壷である。出土例が少ないが，内湾気味に上がる口縁部にやや丸味のある胴部が付くものが出土している。

甕は土器の大半を占める。口縁部の形態だけをみれば細分もされようが，全体的な形態からみれば製作者による差異の方が大きいのではないかと考え，今回は全体的な形態から3種類に分類した。甕の大半がA類に属す。これらは底部の形態により平底（Ⅰ類），丸底（Ⅱ類）に細分され，量的にはA－Ⅰ類が圧倒的に多く，A－Ⅰ類からA－Ⅱ類への変遷が考えられることから存続期間を考える上で重要である。胴部も底部の丸底化に伴って球形への指向がみられるが，壷のようにほぼ球形になったものは出土していない。また，中には長胴に丸底となったものもみられる。B類は口径と胴径がほぼ同じ値を呈するもので，量的には少ない。傾向として，平底や先尖底のものが多いよう

である。C類は深鉢と表現し得るもので，用途の違いを意識したものと考えられる。出土例が数例と少ない。また，B類同様丸底を呈するものは出土していない。

甑は底部に1個の円孔を穿ったものが出土しており，先尖底と丸底のものに分類される。底部から口縁部まで復元できたものが1点（Fig.165－7）あり，それからすると形態的には甕B類とほぼ同じものとみられる。甕同様，先尖底から丸底への変遷が考えられる。

鉢は甕に次ぐ出土量で，時代の変遷がよく表現されるものとみえて形態的にバラエティーに富んでいる。前述のとおり全体では5類に分類されるが，さらにA類は5類，B類は2類，C類は5類に細分される。A類は口径が16cm以上と比較的大きな鉢である。ただし，口径が20cmを越えるものは出土していない。これらは器高指数によって5類に細分でき，A－Ⅰ類が口径に対して器高が最も低いもので，A－Ⅴ類が口径に対して器高が最も高いものである。底部が総じて丸味を有している点や調整技法に大きな違いがないことからみて，この違いは用途的な差異とみることができるのではなかろうか。B類は底部にボタン状の突起がみられるもので，やや古い様相と捉えることができ，大きさにより大形のB－Ⅰ類と小形のB－Ⅱ類に細分される。C類は小形の鉢で，底部の形態を中心に体部の形態などで5類に細分される。C－Ⅰ類からC－Ⅳ類にかけては平底から丸底への変遷と捉えることができ，それに伴って体部から口縁部にかけても直線的に上がるものから内湾気味に上がるものへと変化していく。これは型式変化とみることができよう。C－Ⅴ類はやや特殊なもので，他に類例の出土がなかった。形態的には小形丸底坩に似ており，別型式とした方が適切かもしれない。D類は台付鉢で，ST－203から出土した1例を見るだけである。単体でみると後期後半の中でも比較的古い時期に該当しそうであるが，伴出関係から見る限り新しい部類に属するものと考えざるを得ない。E類は口縁部が体部から外傾ないし外反するものである。確認できたのは1点（Fig.118－185）のみであり，比較的古い様相のものとみられる。高杯は出土例が少なく，確認できたのは大半が脚台部のみであったため分類は行わなかった。なお，この脚台は柱脚が中実なものと中空なものに分けることができる。

これら弥生土器は，概ね後期後半から終末にかけてのものとみられ，形式的には2～3型式に分けることが可能であろう。一方，時期的には古相（Ⅰ期），新相（Ⅱ期）の2時期程度に区分することができるものとみられる。これを踏まえた上で，次に遺構についてみてみることにする。

今回検出した遺構は竪穴住居跡及び竪穴状遺構4軒，土坑1基，溝状遺構1条，ピット1個，不整形の落ち込みが1ヶ所などがある。まず，竪穴住居跡及び竪穴状遺構では，ST－201から多量の土器が出土している。出土状況からみて投棄されたものとみられ，住居廃絶後に土器捨て場となったものと考えられ，土器もバラエティーに富み，時期的にもⅠ期とⅡ期が混在した状態となっている。このことからすると，住居と機能していたのはⅠ期とみられる。ST－202は遺物点数が少ないが，Ⅰ期の中でも比較的新しく，Ⅱ期にも属していたのではないかとみられる。ST－203は報告したように2時期の変遷が考えられる。出土遺物には比較的新しい要素のものがみられることからⅡ期に属すると考えられるが，一部古相のものもみられることから場合によってはⅠ期に住居が造られた可能性も考慮される。ST－202・203の中央部，床面より10～20cm上から焼土が検出されており，ある程度埋まった段階に火を受けたものとみられる。また，ST－201とST－203からは前述のとお

りベット状遺構が検出されている。ST－201のそれはコの字形を呈し，比較的よく見かけられるものであるが，ST－203のそれは県内でも類例のない形状を呈している。まず，三日月形に地山を掘り残してベット状遺構を造り出している。次の段階に盛土によって階段状に三日月形のベットを構築しており，床面を合わすと4段の平場を有するという極めて珍しい形態を呈している。最も高い北側のベットの床面から土製の勾玉（Fig.115－178）が出土し，他に手づくね土器なども見られることから考えると祭祀的要素の強い住居とみることができるのではなかろうか。また，集落全体から見ても，特別な住居であったものと判断される。ST－204は明確な主柱穴が検出されなかったため竪穴状遺構として扱ったが，規模からして住居とみてもよかろう。出土遺物が少ないがⅠ期に属するものとみられ，中でも比較的古いのではなかろうか。SK－201，SD－501，P－201，SX－201などその他の遺構もほぼⅠ期の範疇で捉えることができるものとみられる。E区で検出したSD－501は微高地の頂部に設けられていることから前述のように用水路としての役目を果たしていたものと推察される。ただし，今回の調査ではこの時期の水田跡は確認できず，今後の調査に期待される。P－201からは埋納した状態で壷2点，甕6点，鉢1点が出土しており，祭祀に関連したピットとみられる。

以上今回の調査では弥生時代後期後半から終末にかけての集落の一部を確認することができた。祭祀色の強い住居を始めとして集落の一端を垣間見ることができたが，集落の全容については調査区の南側に存在するであろう残りの集落の調査を待つほかない。今後それらが明らかになればこの集落の様相もより一層解明されるであろうし，この時期を境に忽然と集落が移動する県内の状況についても一石を投じることができるのでなかろうか。

(2) 中世

中世に属するものとして前述のように東西3ヶ所から掘立柱建物跡群を検出している。最も広い面積を占める西側の微高地であるB区では掘立柱建物跡22棟，最も面積の狭い中央部の微高地であるC区では掘立柱建物跡7棟，東端のE区からD区にかけての微高地から掘立柱建物跡6棟をそれぞれ検出している。まず，これら建物の形態からそれぞれの建物群の特徴をみてみよう。

建物の形態として最も注目されるのはSB－201・216・501にみられる形態である。すなわち，2間×3間の身舎に三面庇が付く4間×4間の掘立柱建物で，さらに身舎の庇側の妻から1間目の柱通りに間仕切り柱が立つ形態のものである。面積はSB－501が最も広く56.0㎡，SB－201が52.6㎡，SB－216が46.0㎡となっており，建物規模としては比較的大きなものといえよう。一方，SB－301・303・306なども面積的にはほぼ同じ規模であるが形態的には全く異なっており，性格の違いが指摘される。また，岩井口遺跡にみられたような溝に囲まれた館形態に伴う建物と比較した場合，規模的には勝っているが全体的な建物構成からすれば全く異なる形態と捉えることができよう。岩井口遺跡の掘立柱建物が館（屋敷）に付随する性格のものであることからみて，この三面庇の建物はE区にみられるように数棟で構成された家屋の一つで，その規模からしてそれらの中心となる建物，すなわち母屋とみることができよう。建物構成としては小規模であるが，母屋自体としては比較的規模の大きなものであり，岩井口遺跡で見られたような在地領主に付随する下人の家屋とは明

らかに異なるものとみられる。一方，名主が住むような溝に囲まれた屋敷[15]とも異なり，その中間的な身分の住まいと捉えることができるのではなかろうか。その際，比較的裕福な農民層の住まいとみることもできよう。

この建物が，B区に2棟，E区に1棟確認されている。E区のものは建替えがなく，他に明瞭な建物が確認されていないことからみて長期に存続したものではなく一時期のものと判断される。SB－501からは土師質の搬入の羽釜[16]（Fig.172－19）や青磁（Fig.172－20）が出土しており，ほぼ14世紀代ではないかとみられる。ピット出土遺物の中にも14世紀中ごろに比定される瀬戸・美濃系の小皿[17]があり，他の遺物もほぼその時期に含まれるものとみられる。他方，B区のものは棟方向が異なっており，時期差を指摘できよう。丁度，それぞれの建物から遺物が出土しており，SB－201は備前の擂鉢（Fig.144－207）がⅢ期の後半[18]に属するものとみられることからほぼ14世紀代，SB－216は鎬蓮弁文のある青磁の碗（Fig.144－211）がほぼ13世紀代と位置付けることが可能である。B区にこの他にも棟方向のことなるものや重複関係などから時期差が看取され，ピット出土の遺物の中には15世紀代に比定される常滑の大甕[19]（Fig.147－242）などがみえ，SD－202からもほぼ同じものが出土しており，B区全体では13～15世紀の中で捉えることができそうである。ただ，遺物全体からみると13～14世紀が中心ではなかろうか。

次に，C区で検出された建物についてみてみよう。前述のようにSB－201などの三面庇を持つ建物とは性格的には異なるものとみられ，建物自体は2間×3～5間と標準的な形態をとるが，柱間寸法が7～8尺（2.1～2.4m）と先の建物より一回り長くなっており，面積的にはそれとほとんど変わらない。また，やや規模の小さいSB－304・305は別にしても棟方向が似ており，特に，SB－301～303は位置関係，棟方向からみて建替えによるものと見た方がよさそうである。さらに，SB－301はSB－304以外の建物と重複しており，少なくともこのC区では5時期の変遷が考えられる。単純に一建物の存続期間が20年とした場合，約100年間機能したことになろう。ただ，棟方向に大きな違いはなく，長くても100年程度と考えた方がよさそうである。時期的には瀬戸・美濃系のやや目の粗いおろし皿（Fig.156－28）が13世紀第２四半期に属する[20]こと，東播系須恵器や青磁，白磁が13世紀代に比定されること，12世紀代とみられる遺物が出土していないことから，これら建物群は13世紀前半から14世紀前半にかけてのものと考えることができよう。正しく，B区とE区で検出した建物と同じ時代に存在した建物である。単なる住居ならば同じ形態の建物を配したと考えられ，また，武士層であるならば溝等で区画をなしたのではなかろうか。このような建物形態をとったのは全く別な性格の建物と考えた方がよさそうである。それを推測し得る遺物は確認されていないが，規格的な建物の配置や柱間寸法，柱穴の規模からすると政治的な色彩を感じる。『長宗我部地検帳』によると天正18年当時はこの付近は水田となっており，ヤシキは存在していないし，それに関連する地名も残存していない。また，現存する地名は「エノキダ」（A・C～E区），「シマダ」（B区）であり，『長宗我部地検帳』には「エノキダ」の名は見えず，近世以降についた名称と思われる。このように文献等でもその性格を想定させる資料はなく，実際，どのような性格であったかは今後の調査，研究に期待される。

以上，二ノ部遺跡についてみてきたが，弥生時代では後期後半から終末期にかけての集落，中世

では13～14世紀を中心とした建物群を検出することができた。この二ノ部遺跡の所在する地区は斗賀野地区でも比較的立地に恵まれた部分とみられることから今回確認した弥生の集落は母村的集落の一部である可能性も考えられよう。また，13～14世紀を中心とした建物跡は，岩井口遺跡の館の存続時期と重なっており，在地領主の居館と農家の住い等と把握することができるのではなかろうか。今後，隣接する「土居ヤシキ」の地名の残る二ノ部南遺跡との関係を調査，研究することが二ノ部遺跡の性格をより明確にするものと考えられる。

3. 二ノ部城跡について

今回の調査は，二ノ部城本体の調査ではなく，城を取り囲む堀跡とみられる部分が対象であった。平成2年度の試掘調査では下層部から当時の遺物が出土しており，今回の調査では少なからず二ノ部城に関連した遺物が出土するものと期待されたが，調査区が水路と農道部分に限定されたため堀の立ち上がりや土器の集中箇所[21]を確認するには至らなかった。しかし，当時の基底面と思われる層から備前Ⅳ期[22]の擂鉢や壷の破片が出土していること，現在の水田が城を取り囲むように巡っていることなどから15世紀代には堀の形態をとっていたものと推察される。また，『長宗我部地検帳』にも「弓場東ノ下南ノ堀懸テ」とか「同し（東二ノ塀）ノ西溝懸テ堀タオシ」などの記述がみられることから堀は存在したものと考えられる。堀の形態としては，前述のように堀の立ち上がりを確認するには至らなかったが，人為的に規格性を持ったものではなく，河川を利用した堀と見た方が良さそうである。ただし，少なくとも要所々には手を加えていたものと考えられ，何箇所かには日常雑器を廃棄した場所もあったものと推察される。なお，城本体については第Ⅳ章でふれている。

4. 結語

叙上，平成4・5年度に調査した岩井口遺跡，二ノ部遺跡，二ノ部城跡について検出された遺構，出土した遺物などからそれぞれの性格や存続時期などについて考えてきた。岩井口遺跡と二ノ部遺跡は今回の県営圃場整備事業が切っ掛けで新たに確認された遺跡であった。ほとんどが水田下に存在するため表面採取に頼る分布調査だけでは確認されなかった可能性も十分考えられたが，対象地のほぼ全域について事前の試掘調査が行えたことは幸運であったものと思われる。特に，在地領主の居館とみられる遺構が検出された岩井口遺跡は，現地形を見る限り立地的に二ノ部遺跡などに比べて決して良好な場所とは思われなかったし，日当たりもあまり良くなく，冬場は午後2時以降ほとんど日が当たらないところである。このような地に敢えて居館を構えたのは，基盤が極めて水捌の良い火山灰（鬼界アカホヤテフラ）であったことに起因するのでなかろうか。平成6年度に調査予定の官衙関連遺跡とみられる上美都岐遺跡も基盤は同じ火山灰（鬼界アカホヤテフラ）であり，湿地の多い斗賀野盆地ではこのような土地が好んで選ばれた可能性が十分考えられよう。

最後に，これら遺跡の消長を概述し結語としたい。岩井口遺跡の西側の山の中腹には縄文時代草創期の不動ガ岩屋洞穴遺跡が確認されており，佐川町の遺跡はこれを初現とする。以降，町内各地で縄文時代の遺跡が確認されているが，今回調査した遺跡では，岩井口遺跡の石鏃1点以外に縄文時代に遡る遺構は確認されなかった。始めて，人の痕跡を確認できるのは弥生時代前期の新段階に

なってからであろう。町内ではこの時期まで遡る資料が今まで確認されていなかったことからして注目されることである。ただ，部分的な資料であり，今後補充していかなければならない。岩井口遺跡では中期に属する遺構も数は少ないが検出されている。町内でも前述のとおりこの時期の石包丁が発見されており，今後比較的大きな集落が確認される可能性も秘めている。弥生時代を通じ最も人口が増加するのはやはり後期後半から終末にかけての時期とみられる。これは県内一円に言えることであり，至るところでこの時期の集落跡が確認されている。言に違わず，岩井口・二ノ部両遺跡にも集落が形成されている。二ノ部遺跡は今後の発見如何よっては母村的集落であった可能性も考えられようし，三日月形の階段状をなしたベット状遺構を有した竪穴住居跡の存在などこの時期の祭祀形態を解明する上で極めて重要な資料を提供している。一方，岩井口遺跡のそれは分村的な性格が濃いものではなかろうか。住居形態では周溝を有する住居の検出が注目される。これら集落も終末期を境に移動したものとみられ，忽然と人の痕跡が絶える。これも県内一円に見られる現象であり，正に古墳時代の到来を暗示しているようである。ただ，集落がどこに移動していったのか明確になっておらず，古墳時代の様相解明と共に今後の研究課題として残っている。前期古墳がほとんど存在しない特異な現状ともリンクして考えなければならないであろう。

斗賀野地区に留まらず，町内で古墳時代以降，遺構，遺物が確認されるのは古代律令制度になる奈良時代，中でも後半を待たなければならない。今回は対象区域から外れていたが，事前の試掘調査の際二ノ部遺跡から平安時代前半の遺物が発見されている。今回調査した遺跡から次に遺構が確認されるのは鎌倉時代になってからであり，活発化するのは鎌倉時代後半から南北朝動乱期にかけてである。正にこの時期岩井口の地に在地領主とみられる人物が溝に囲まれた館を構える。時を同じくして二ノ部の地にも住居等が造られるようになる。14世紀に最も繁栄し，そして，15世紀前半頃まで生活の痕跡を確認することができる。16世紀には一部の遺構を残して水田化して行く。これは戦国時代の到来とほぼ期を一にしてるようで，下剋上と共に今までの居住地は廃絶する。この時期二ノ部城が活動の拠点となってくるようで，居住場所も城下に移ったものと思われる。しかし，元亀二年（1571年）長宗我部氏によって二ノ部城も落城し，斗賀野の地も佐川と同様長宗我部氏の支配下に入ってしまう。この時期には各遺跡とも地下に埋没して，すべて水田化している。

以後，山内氏が高知に入城し，中世の終焉，近世の始まりとなり，各遺跡は田園風景の中に静かに眠り，今日に至る。

註

(1) 後述している二ノ部遺跡の弥生の項で記したⅡ期に該当するものと考えられる。

(2) 廣田佳久「周辺地域における土師器の様相－1. 南四国の古式土師器－」『研究紀要』第1号（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター　1994.3

(3) (2) に同じ

(4) 下村公彦「6. 中～近世小結　2. 遺構」『田村遺跡群』第10分冊　高知県教育委員会　1986.3

(5) 廣田佳久『岩井口遺跡Ⅱ』県道本郷・斗賀野停車場線改良工事に伴う発掘調査報告書　佐川町教育委員会　1995.3

(6) 岸本一郎「東播磨」『季刊考古学』特集 須恵器の編年とその時代 第42号　雄山閣　1993.2

(7) 間壁忠彦『備前焼』考古学ライブラリー60　ニューサイエンス社　1991

(8) 間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集 3 日本の中世』　小学館　1977

(9) 松田直則「6. 中～近世小結　1. 遺物」『田村遺跡群』第10分冊　高知県教育委員会　1986.3にも同形態のものが見られる。

(10) (6) に同じ

(11) 山下峰司『海上遺跡』瀬戸市教育委員会　1992.3
藤沢良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館　1991

(12) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所　1982

(13) (7) ・ (8) に同じ

(14) 秋沢繁「第三編　中世・近世」『佐川町史』上巻　佐川町役場　1982

(15) (4) に同じ

(16) (12) に同じ

(17) (11) に同じ

(18) (7) に同じ

(19) 赤羽一郎『常滑焼－中世窯の様相－』考古学ライブラリー23　ニューサイエンス社　1984

(20) (11) に同じ

(21) 出原恵三『芳原城跡発掘調査報告書』高知県教育委員会　1984　からは自然の湿地を利用した堀から多量の遺物が出土している。

(22) (7) ・ (8) に同じ

参考文献

『長宗我部地検帳』高岡郡　下の一　高知県立図書館　1963

『大系　日本史　6』小学館　1988

Tab. 4 岩井口遺跡 掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模						面積 (m²)	棟方向 (Nは真北)	備考
	梁 × 桁 (間) (間)	梁間m	×	桁行m	柱間寸法 梁m	柱間寸法 桁m			
SB－101	2 × 3	4.65	×	6.75	2.10, 2.55	2.10, 2.55	31.4	N－53° －W	
SB－102	2 × 4	3.90	×	6.75	1.95	1.75～2.30	26.3	N－53° －W	東庇
SB－103	2 × 3	4.00	×	6.00	1.60, 2.40	1.60～2.40	24.0	N－53° －W	
SB－104	2 × 2	3.30	×	3.70	1.50, 1.80	1.60・2.10	12.2	N－37° －E	
SB－105	3 × 3	5.60	×	5.90	2.15	1.60, 2.20	33.0	N－56° －W	南庇
SB－106	2 × 4	3.90	×	6.70	1.60, 1.70	0.50～2.60	26.1	N－52° －W	東庇
SB－107	2 × 3	3.90	×	6.60	1.60～2.30	2.20	25.7	N－53° －W	
SB－108	2 × 3	3.50	×	6.10	1.60, 1.90	1.80～2.40	21.4	N－52.5° －W	
SB－109	2 × 2	4.00	×	4.60	1.90, 2.10	2.10, 2.50	18.4	N－53° －W	
SB－110	2 × 2	2.30	×	2.90	1.10, 1.20	1.40, 1.50	6.7	N－38° －E	
SB－111	2 × 3	3.80	×	5.90	1.50～2.30	1.80, 2.30	22.4	N－52° －W	
SB－112	2 × 2	3.40	×	5.00	1.60, 1.80	2.40, 2.60	22.5	N－58° －W	張出
SB－113	2 × 4	3.60	×	6.30	1.80	1.50, 1.65	32.8	N－50° －W	〃
SB－114	2 × 3	3.30～3.50	×	4.80～5.10	1.65, 1.85	1.35～2.25	16.7	N－51～58° －W	
SB－115	2 × 2	3.30～3.60	×	4.70～4.90	1.50, 1.80	1.90～3.00	16.7	N－58～59° －W	
SB－116	2 × 3	3.60～3.80	×	5.80～5.85	1.80～2.00	1.65～2.50	22.0	N－34° －E	
SB－117	2 × 3	3.00	×	4.50	1.50	1.20, 2.10	13.5	N－58° －W	
SB－118	2 × 3	4.30	×	6.10～6.20	2.10, 2.20	1.30～2.80	30.2	N－46° －W	東庇,張出
SB－119	1 × 2	1.65～1.80	×	3.40	1.65～1.80	1.00～2.40	5.9	N－43.5° －W	
SB－120	1 × 2	2.25	×	3.80～3.90	2.25	1.80～2.10	8.7	N－39° －E	
SB－121	2× 2	—	×	4.70	—	2.30, 2.40	—	N－40.5° －W	
SB－122	2 × 2	2.30～2.40	×	5.25	1.10～2.40	1.50, 1.95	12.3	N－34° －W	
SB－123	2 × 1	2.10～2.25	×	2.75	1.00～2.25	2.75	6.10	N－53° －W	
SB－124	2 × 3	3.00	×	4.95	1.50	1.50, 1.95	14.9	N－58° －E	
SB－125	2 × 3	2.15	×	2.60～3.00	1.00, 1.15	1.00, 2.60	6.0	N－56° －W	
SB－201	1 × 3	2.20～2.30	×	5.25～5.65	2.20, 2.30	1.00～2.25	12.2	N－50° －W	
SB－202	2 × 2	2.40～2.60	×	4.15	1.25, 1.35	2.00, 2.15	10.4	N－56° －E	
SB－203	1 × 3	2.15	×	4.60～4.75	2.15	1.40～1.75	10.1	N－61° －E	
SB－204	1 × 3	2.85～3.00	×	4.55～4.70	2.85, 3.00	1.15～2.10	13.5	N－70° －E	
SB－205	1 × 2	3.10	×	3.90～4.30	3.10	1.40～2.50	12.7	N－88° －E	
SB－206	2 × 2	3.25～3.35	×	4.00	1.55, 1.80	2.00	13.2	N－43° －W	
SB－207	1 × 2	2.15～2.20	×	3.25～3.60	2.15, 2.20	1.60～2.00	7.6	N－41° －E	
SB－301	1 × 4～5	2.20	×	7.40～7.45	2.20	1.50～1.90	16.3	N－48.5° －W	
SB－302	2 × 3	3.20～3.40	×	5.50	1.30, 1.90	1.30～2.30	18.2	N－48° －W	
SB－303	2 × 2	2.40	×	3.30	1.20	1.50～1.80	7.9	N－43° －E	
SB－304	1 × 2	2.35	×	3.50	2.35	1.60～1.90	8.2	N－45° －E	
SB－305	2 × 2	4.10	×	4.15	1.90, 2.20	2.00, 2.15	17.0	N－47° －W	
SB－401	2 × 3	2.20	×	3.20	1.00	1.00, 1.10	6.4	N－41° －E	

Tab.5 岩井口遺跡 塀跡計測表

遺構番号	規模			方向 (Nは真北)	備考
	柱穴数	全長 m	柱間距離 m		
SA－101	14	25.00	1.50～2.10		コの字形
SA－102	8	14.80	1.75～2.70	N—42° —E	
SA－103	4	6.00	1.90～2.10	N—40° —E	
SA－104	6	10.40	1.80～2.70		L字形
SA－105	5	7.80	1.80，2.10	N—35° —E	
SA－106	3	3.30	1.50，1.80	N—54° —W	
SA－107	7	11.70	1.40～2.30		L字形
SA－108	7	5.70	0.70～1.10	N—42.5° —W	
SA－109	3	3.00	1.40～1.60	N—48° —E	
SA－110	5	6.35	1.50～1.65	N—64° —E	
SA－111	5	8.05	1.30～2.90	N—61° —W	
SA－201	7	10.40	1.30～2.10		L字形
SA－202	4	3.90	1.15～1.50	N—58° —E	
SA－203	3	2.45	1.20，1.25	N—37° —W	
SA－204	3	3.45	1.65，1.80	N—40° —W	
SA－301	7	10.25	1.20～2.10		L字形
SA－302	4	5.10	1.65～1.80	N—43° —E	
SA－303	3	2.70	1.35	N—48° —E	
SA－501	4	4.85	1.35～1.95	N—48° —W	
SA－502	6	5.80	1.00～1.30		

Tab. 6 二ノ部遺跡 掘立柱建物跡計測表

遺構番号	規模						面積 (m²)	棟方向 (Nは真北)	備考
	梁 × 桁 (間) (間)	梁間m	×	桁行m	柱間寸法 梁m	柱間寸法 桁m			
SB−101	2 × 1	3.60	×	1.80	1.80	1.80	(6.5)	N−80° −W	
SB−102	1 × 2	2.00以上	×	6.60	2.00	3.20, 3.40	(13.2)	N−1° −W	
SB−103	2 × 1	3.30	×	1.50以上	1.50〜1.80	1.50	(5.0)	N−87° −W	
SB−201	4 × 4	7.30	×	7.20	2.00	1.80	52.6	N−135° −W	3面庇
SB−202	2 × 4	3.50	×	6.90	1.50, 2.00	1.50, 2.00	24.2	N−87° −E	
SB−203	2 × 3	3.20	×	5.10	1.40, 1.80	1.50, 1.80	16.3	N−14° −W	
SB−204	2 × 3	3.90〜4.10	×	5.80〜5.90	1.80, 2.10	1.80, 2.20	23.4	N−1° −W	
SB−205	1 × 2	1.65	×	4.20	1.65	1.80, 2.40	6.9	N−89° −E	
SB−206	1 × 2	2.00	×	4.40	2.00	1.90, 2.50	8.8	N−72° −E	
SB−207	2 × 3	3.60	×	5.80〜5.95	1.80	1.80, 2.35	21.2	N−84° −E	
SB−208	2 × 3	3.80	×	6.30	1.80, 2.00	1.80, 2.70	23.9	N−86° −E	
SB−209	2 × 4	4.10	×	8.15〜8.30	1.80, 2.30	1.65, 2.50	33.6	N−2° −W	
SB−210	2 × 3	3.30	×	5.35〜5.45	1.40, 1.90	1.65, 1.90	17.8	N−5° −W	
SB−211	3 × 2	4.30	×	4.45	1.80〜1.90	2.20, 2.25	19.1	N−6° −W	東庇
SB−212	2 × 2	3.50〜3.75	×	4.40〜4.50	1.50, 2.15	2.00, 2.40	16.2	N−83° −E	
SB−213	1 × 2	2.40	×	3.60	2.40	1.60, 2.00	8.6	N−2° −W	
SB−214	1 × 2	2.10	×	4.50	2.10	2.10, 2.40	9.5	N−87° −E	
SB−215	2 × 3	3.30	×	5.90	1.65	1.80, 2.20	19.5	N−85° −E	
SB−216	4 × 4	6.30	×	7.30	1.50, 1.60	1.80, 2.50	46.0	N−86° −E	3面庇
SB−217	2 × 3	3.60	×	4.00	1.80	1.20, 1.40	14.4	N−0° −E	
SB−218	1 × 2	1.60	×	3.70	1.60	1.80, 1.90	5.9	N−84° −E	
SB−219	2 × 3	3.80	×	6.90	1.90	2.00, 2.90	26.2	N−1° −E	
SB−220	2 × 5	3.90	×	8.90	1.80, 2.10	1.90〜2.10	34.7	N−0° −W	東庇
SB−301	2 × 4	5.00	×	8.70	2.00〜3.00	2.00, 2.30	48.9	N−6° −W	張出
SB−302	2 × 4	3.90	×	8.20	1.80, 2.10	1.80, 2.20	32.0	N−7° −W	
SB−303	2 × 5	4.40〜4.60	×	10.70〜10.80	1.70, 2.10	1.90, 2.30	48.4	N−7° −W	
SB−304	1 × 2	2.20	×	4.00	2.20	1.80, 2.20	8.8	N−7° −W	
SB−305	2 × 2	4.20	×	4.50	2.10	2.20, 2.40	18.9	N−7° −W	
SB−306	2 × 5	3.60〜3.80	×	8.50〜8.70	1.40, 2.20	2.00, 2.40	31.8	N−2° −W	
SB−307	2 × 3	5.70〜6.00	×	6.50〜6.60	2.70, 3.30	1.90, 2.60	38.3	N−4° −W	
SB−501	4 × 4	7.00	×	8.00	2.10	2.00	56.0	N−88° −E	3面庇
SB−502	2 × 2	3.30	×	3.40〜3.80	1.50, 1.80	1.60, 2.00	11.9	N−84° −W	
SB−503	1 × 1	2.60	×	3.10	2.60	3.10	8.1	N−85° −W	
SB−504	1 × 1	1.60	×	2.10	1.60	2.00	3.2	N−1° −E	
SB−505	2 × 2	3.50	×	4.00	1.70〜1.90	1.60, 2.40	14.0	N−86° −E	
SB−506	2 × 2	3.60	×	4.30	1.80	1.80, 2.50	15.5	N−0° −W	

Tab.7 二ノ部遺跡 塀跡計測表

遺構番号	規模			方向 (Nは真北)	備考
	柱穴数	全長 m	柱間距離 m		
SA−101	6	10.00	2.00	N−1° −E	
SA−102	4	5.70	1.80〜2.10	N−1° −E	
SA−103	4	6.20	2.00〜2.10	N−1° −E	
SA−201	4	7.80	1.90〜3.00	N−18° −E	
SA−202	3	4.40	2.10,2.30	N−19° −E	
SA−203	7	13.10	1.60〜2.70	N−18° −E	
SA−204	4	5.70	1.80,2.10	N−1° −E	
SA−205	7	16.00	2.10〜3.20		L字形
SA−301	4	6.40	2.00〜2.20	N−85° −W	
SA−302	5	9.30	2.00,2.90	N−87° −W	
SA−303	7	9.95	1.50〜2.00		L字形
SA−304	4	6.15	1.90〜2.15	N−84° −W	
SA−501	6	8.50	1.50,2.00		L字形
SA−502	5	8.90	1.90〜2.50	N−3° −E	
SA−503	5	8.00	1.70〜2.30	N−84° −E	
SA−504	4	6.40	1.80〜2.30	N−2° −E	
SA−505	6	8.00	1.10〜2.20		L字形

図　版

岩井口遺跡

調査前全景（北より）

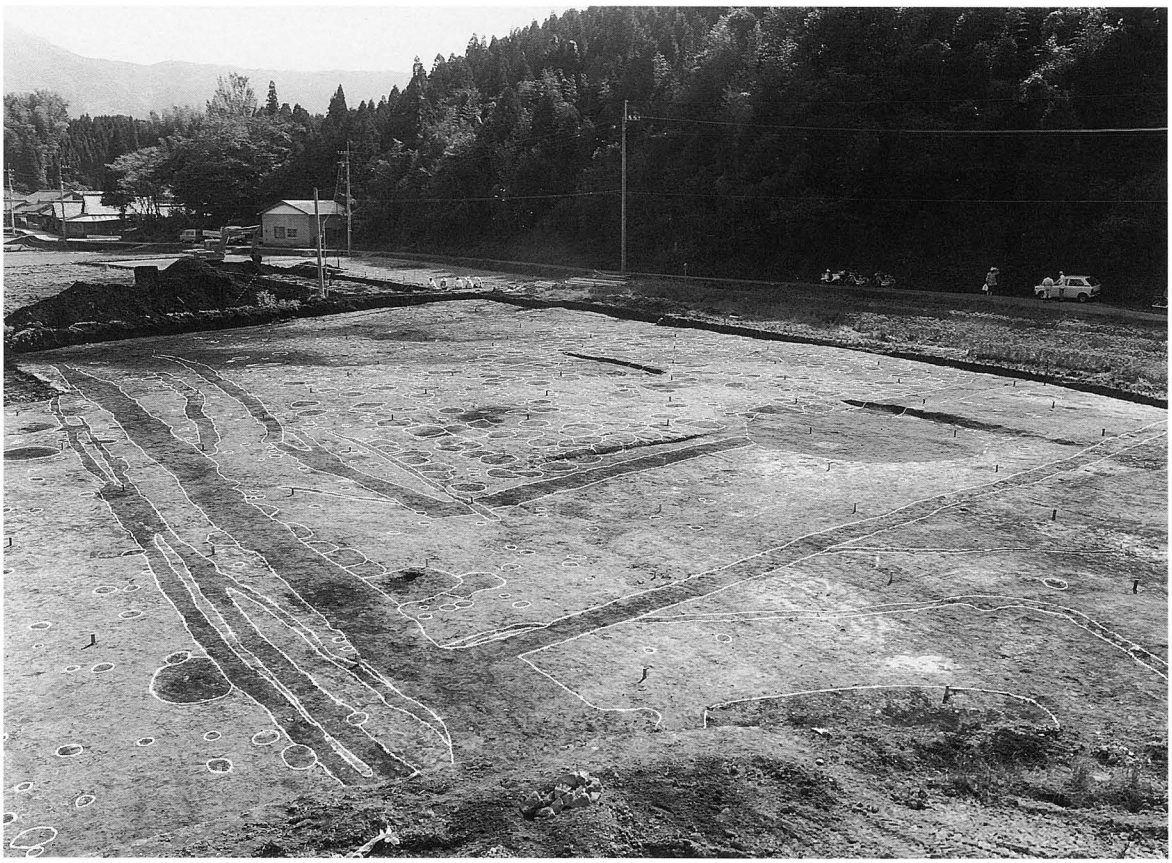
調査前全景（南より）

試掘トレンチ（D～Fトレンチ）（南より）

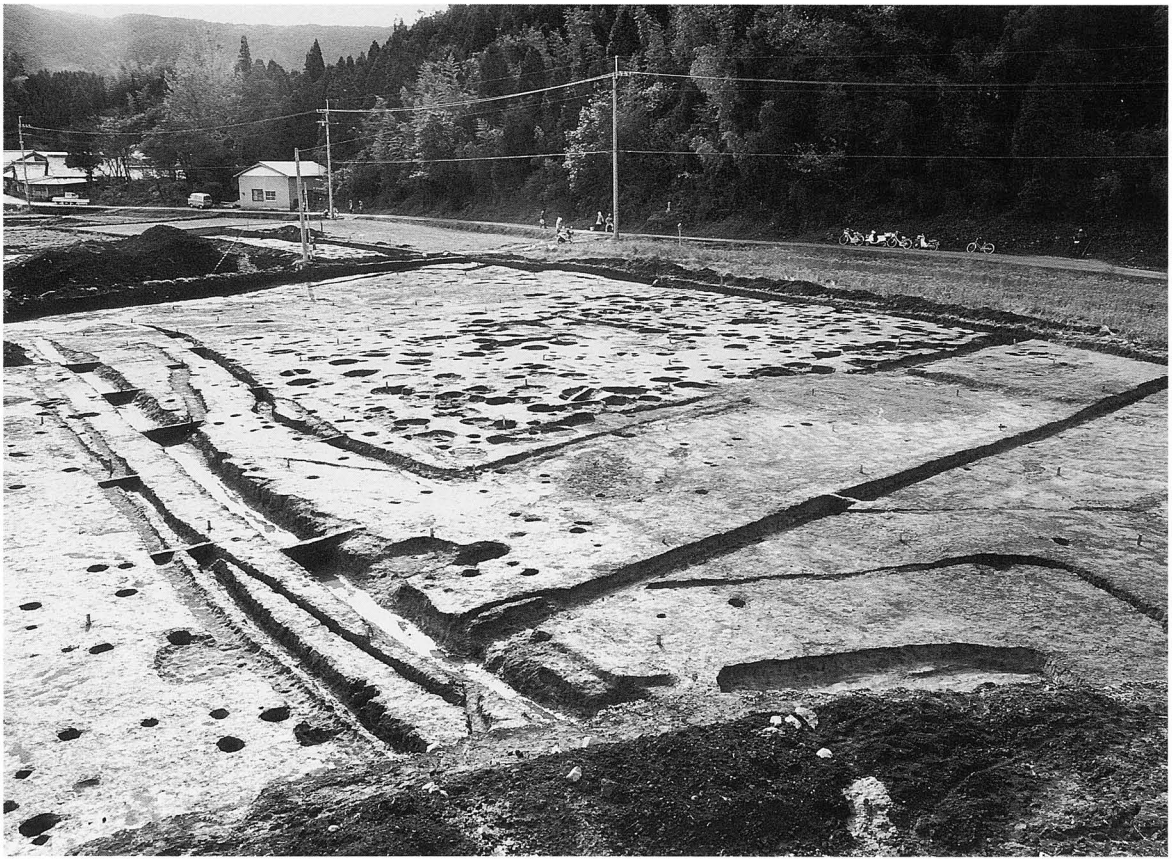
試掘トレンチ（Eトレンチ）（南より）

ST－101（西より）

ST－101，SD－101（南より）

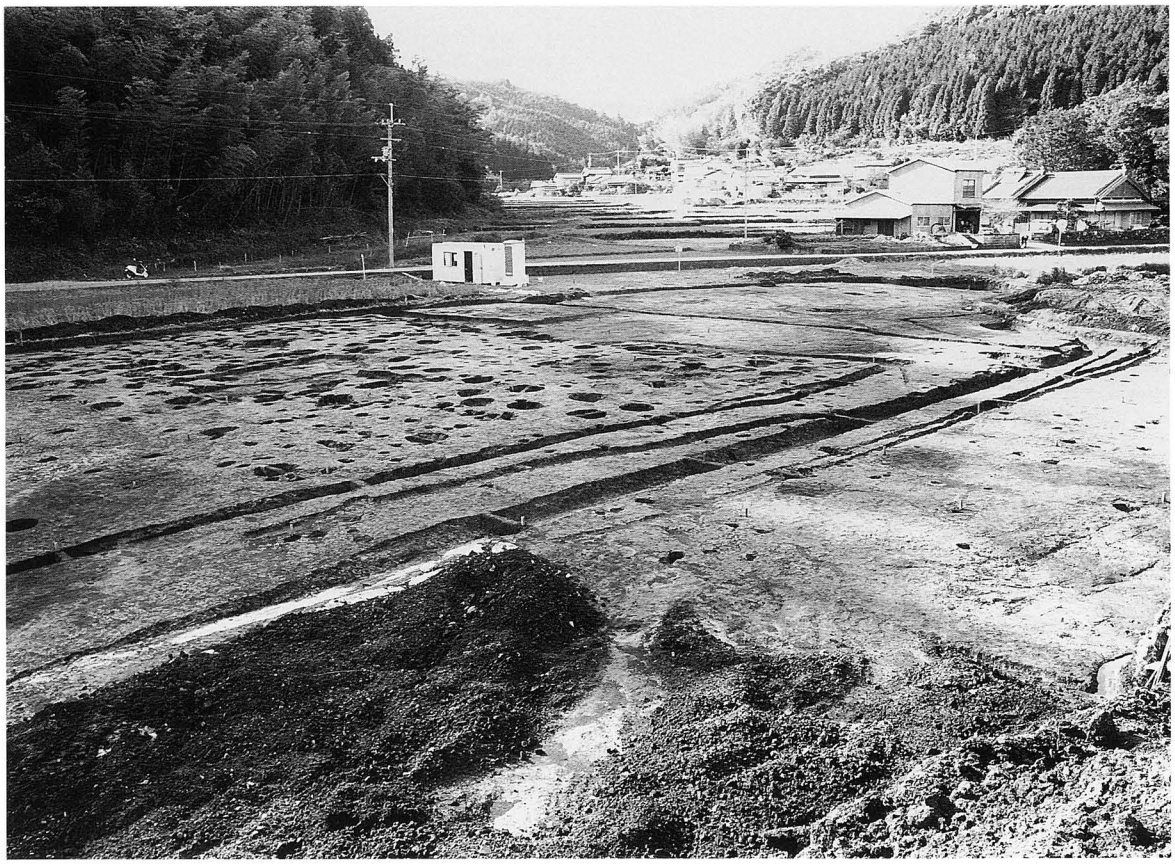


A区　遺構検出状態（北西より）



A区　遺構完掘状態（北西より）

A区　遺構検出状態（東より）



A区　遺構完掘状態（東より）

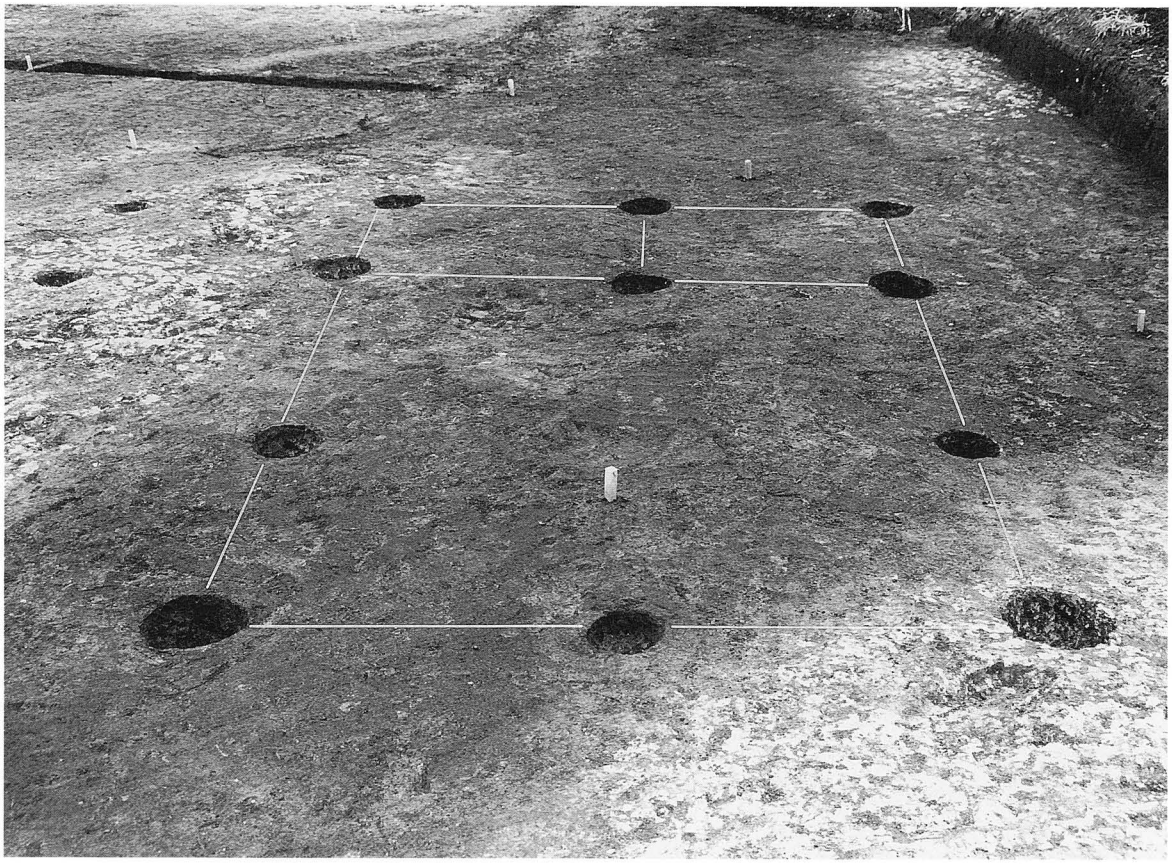
A区　遺構検出状態（西より）

A区　遺構完掘状態（西より）

A区　遺構検出状態（南より）

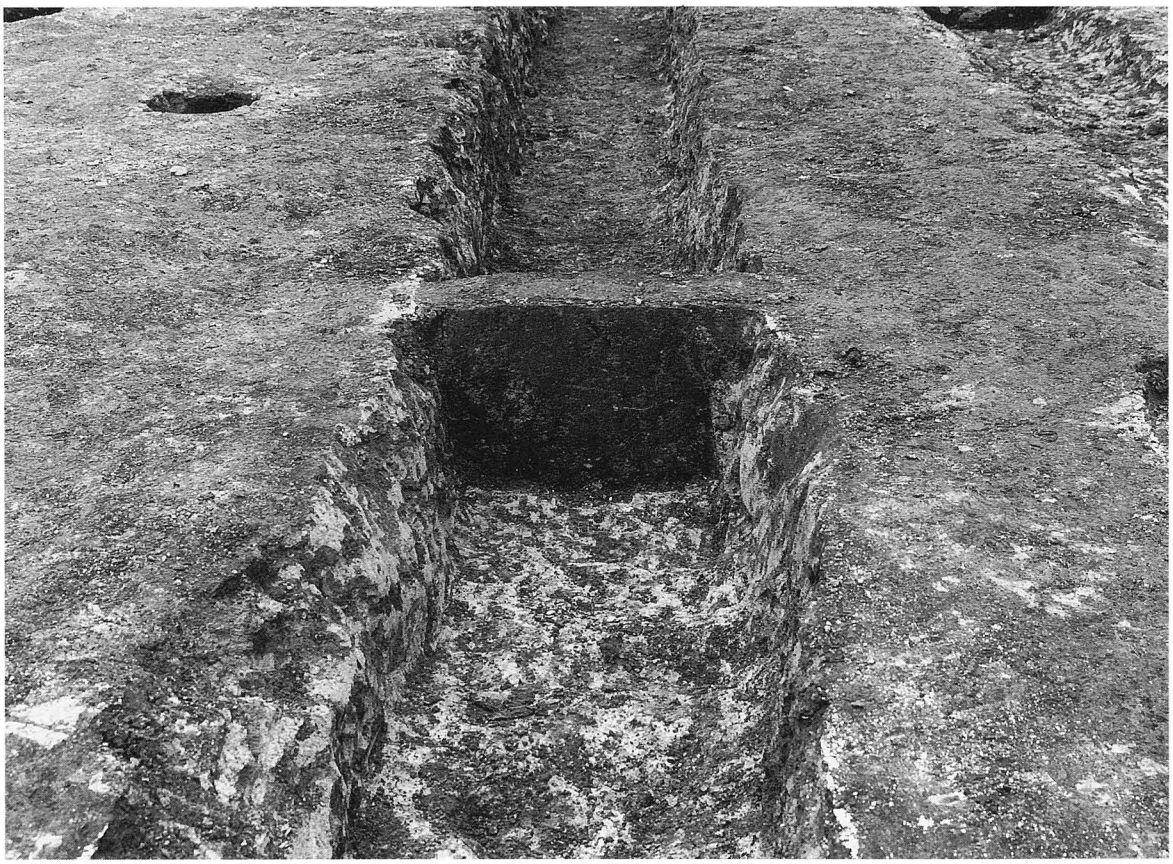
A区　遺構完掘状態（南より）

SB－115（南より）



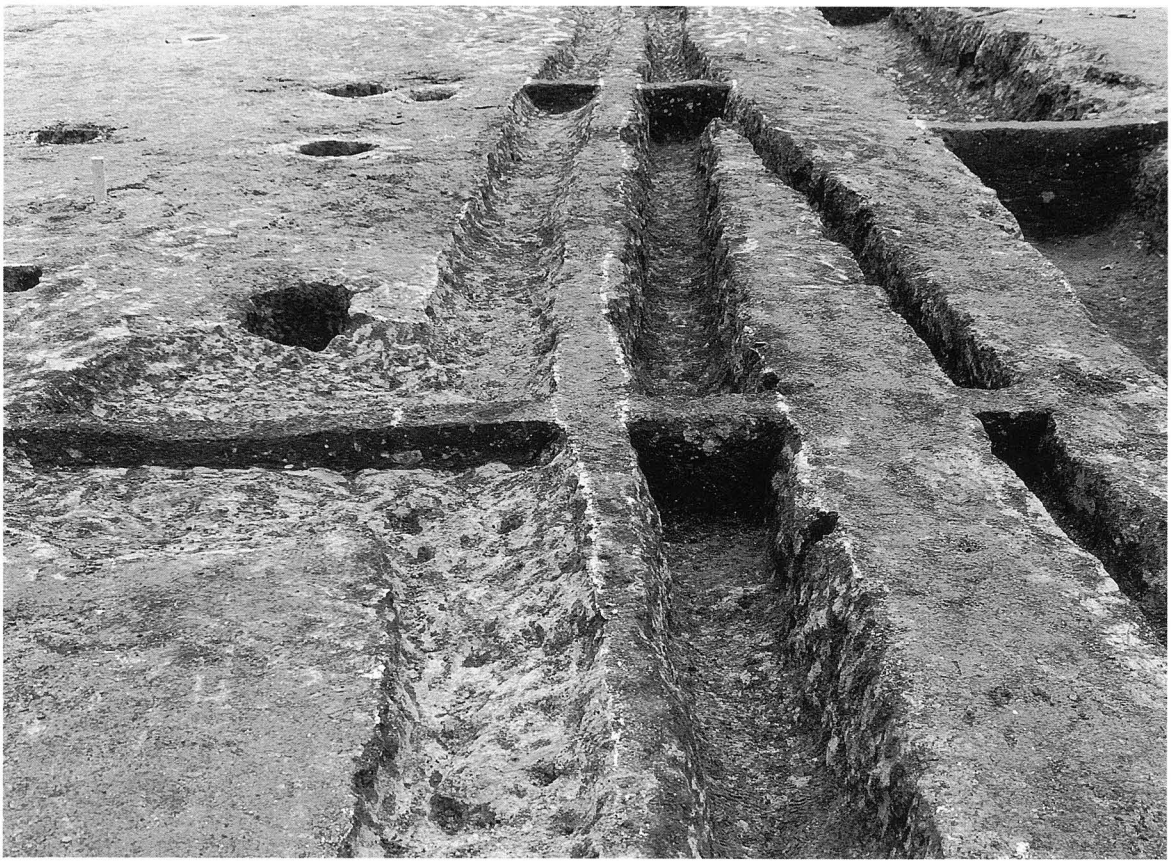
SB－116（南より）

SD－102・103（北より）



SD－103（東より）

SD－111（東より）



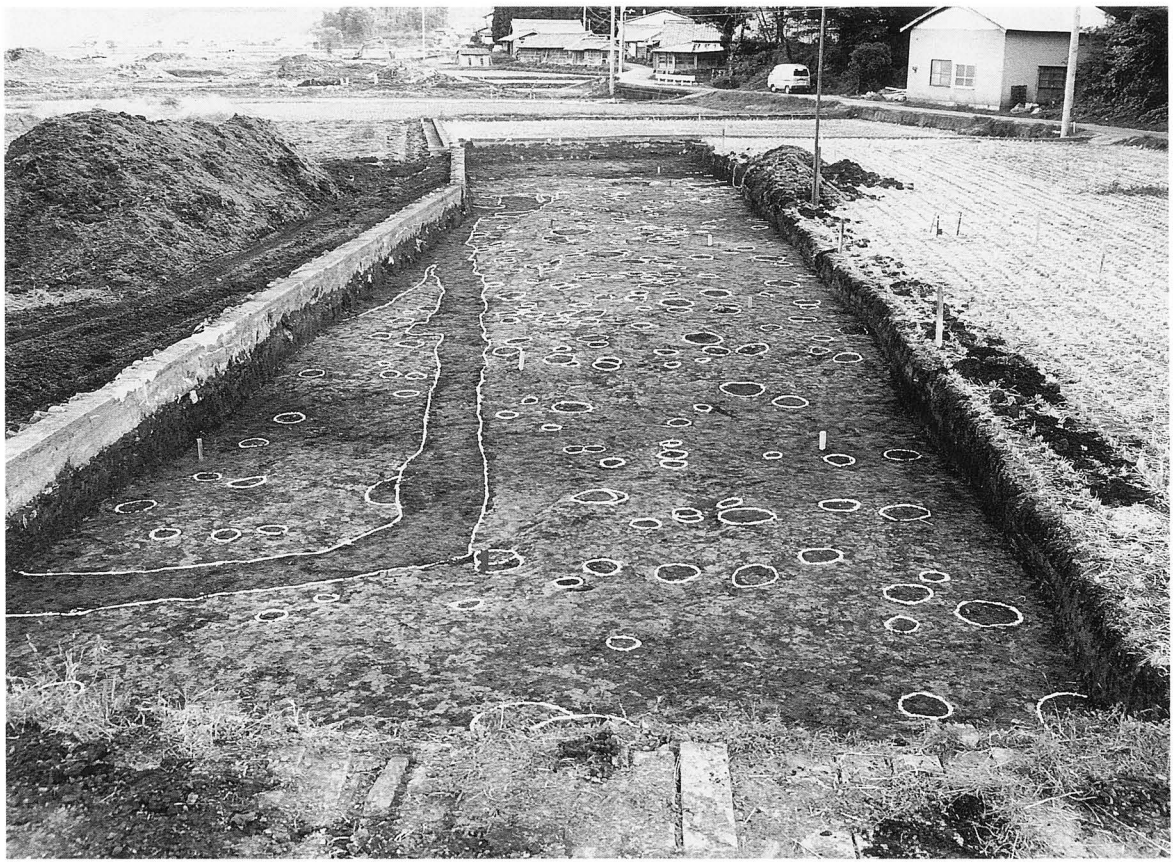
SD－112～114（西より）

B区　遺構検出状態（北より）

B区　遺構完掘状態（北より）

SB－204～206（北東より）

SB－207（北東より）



C区　遺構検出状態（西より）

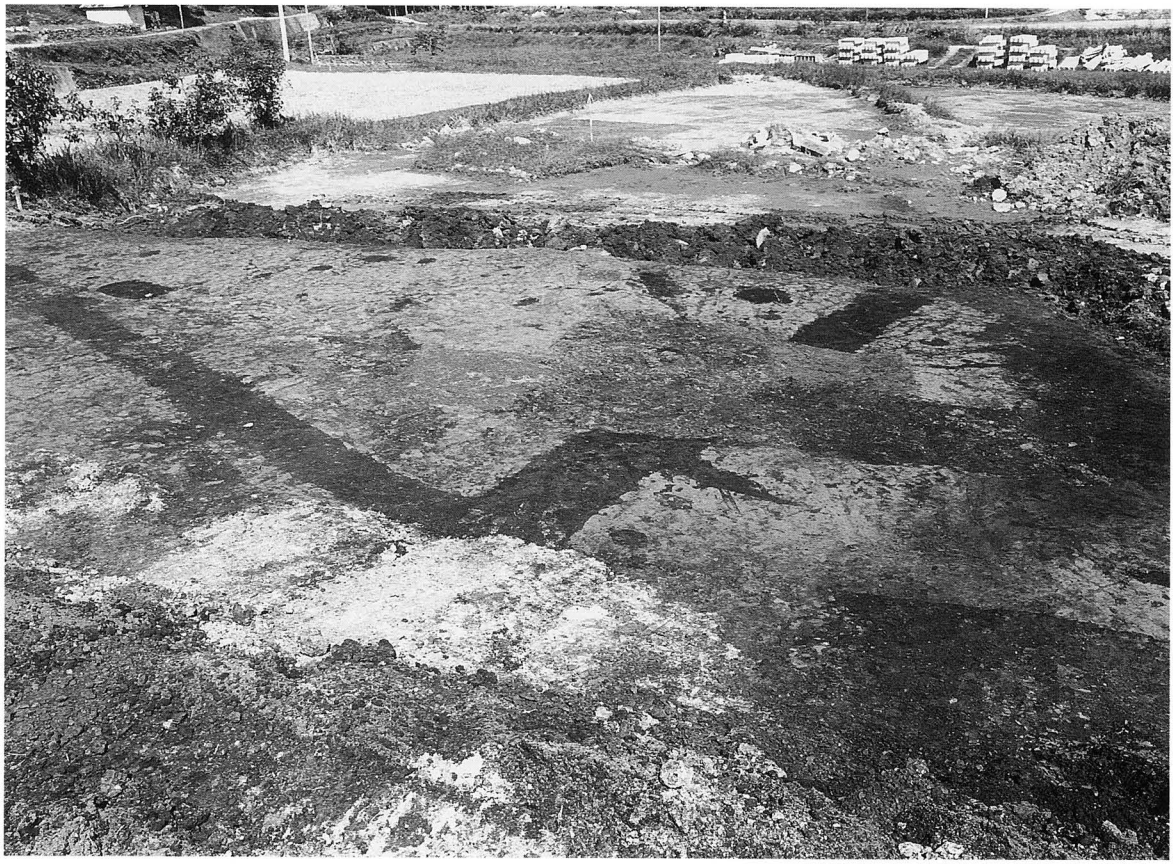
C区　遺構完掘状態（西より）

C区　遺構検出状態（東より）

C区　遺構完掘状態（東より）

SB－301・302、SA－301（西より）

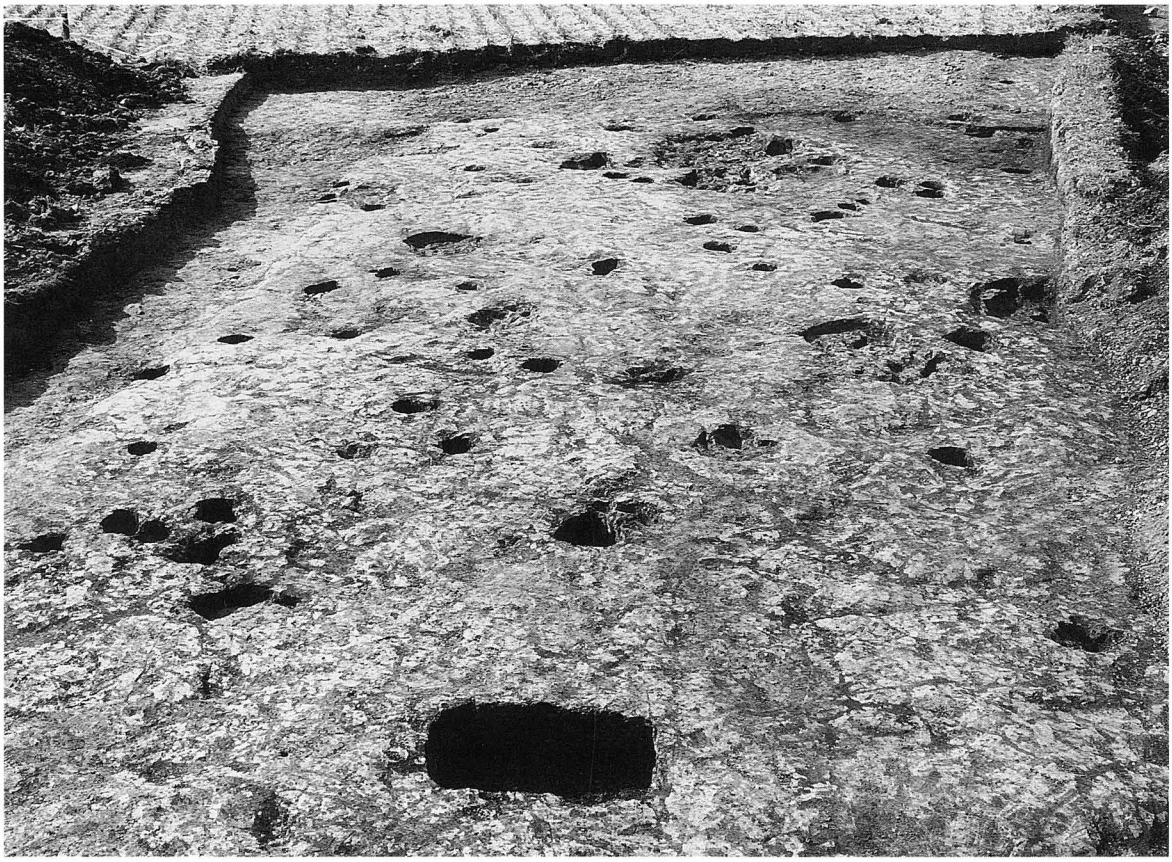
SB－302・303（西より）



D区　遺構検出状態（南より）

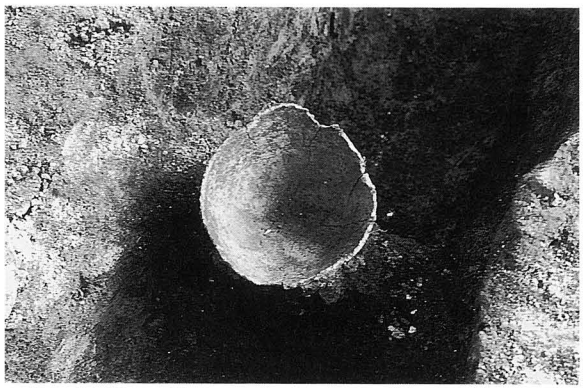
D区　遺構完掘状態（南より）

E区　遺構検出状態（東より）

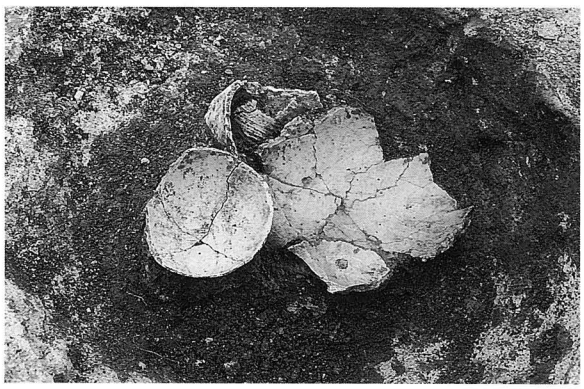


E区　遺構完掘状態（東より）

SD－101　弥生土器（A区－17）出土状態



SD－101　弥生土器（A区－16）出土状態



P－101　弥生土器（A区－18～20）出土状態

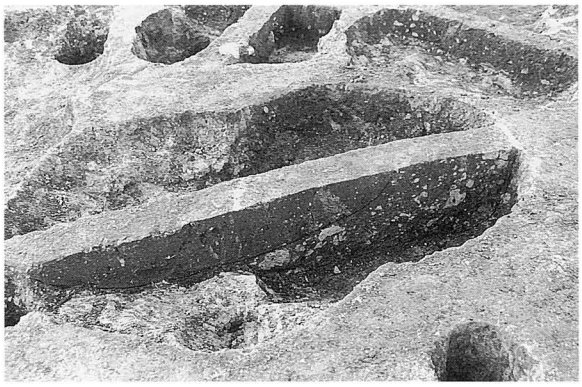
SD－101（東より）

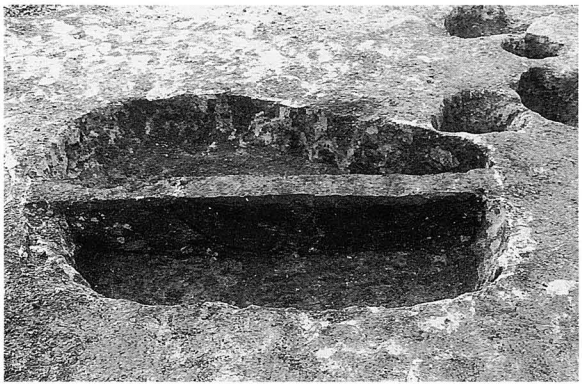
SD－102　土師質土器出土状態１（南より）

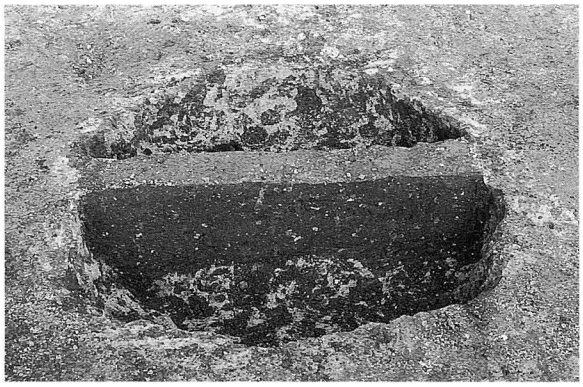
SD－102　土師質土器出土状態２（西より）

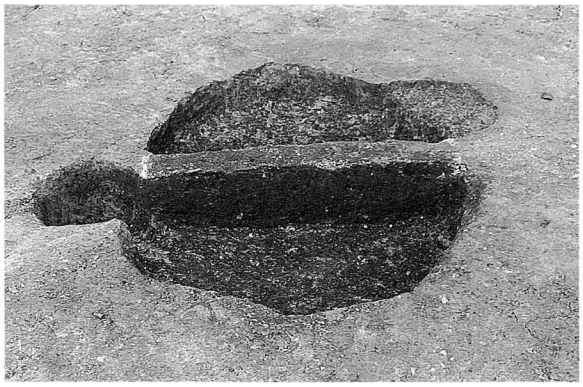
SD－102　土師質土器出土状態３（西より）

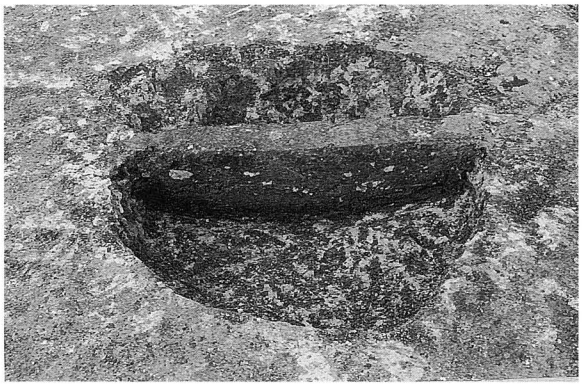
SD－102　土師質土器出土状態４（北西より）

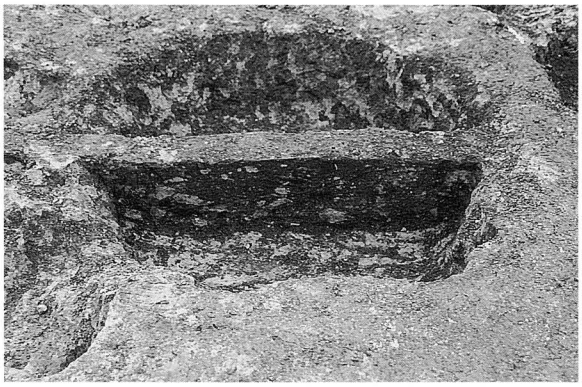

円形ピット1

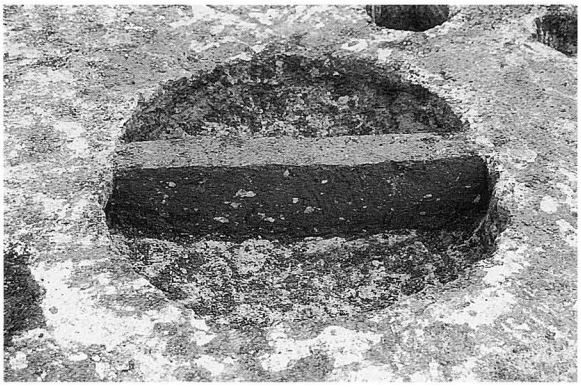

円形ピット2

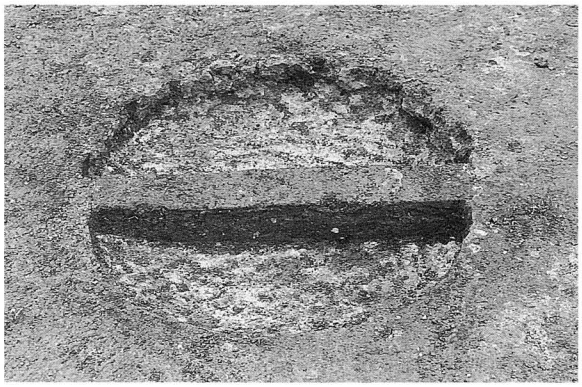

円形ピット3


円形ピット4


円形ピット5


円形ピット6


円形ピット7


円形ピット8